

---

cottoncolor

杜若

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

cottoncolor

### 【Nコード】

N3776Q

### 【作者名】

杜若

### 【あらすじ】

年末を迎えあわただしさを増した坪内総合病院。

科長の小鉢、常勤医の片 研修医の佐々木。そこに加わった

夜間当直専門のアルバイト医師前田霧子。その美しい容姿にテンシ

ョンが上がる三人だったが。ホラー小説 残酷な描写あり。閲覧の

際にはご了承ください。

## 一話（前書き）

久々の投稿になります。いつものメンバーが返ってまいりました  
またお付き合い願えば幸いです。題名は谷山浩子さんの曲名から。

## 一話

### prologue

前田霧子が鏡台の前で唇にベージュ色のルージュを塗り終えた時、携帯が軽やかな音楽を奏で始めた。

The New Christy Minstrelsの「Green Green」メールや電話ではなく午後五時、出勤時間にセットしたアラームだ。

仕事に出るのは数カ月ぶりだが、身支度に関してはカンは鈍っていなかったらしい。

流れ続ける曲に合わせて口角をあげ笑顔を作って見た。

鏡の中の自分は壁にかけられた化粧品メーカーのカレンダーに印刷された人気女優と大差ない美しさだと思える。実際街を歩けば、霧子とすれ違った男性は大概鼻の下を伸ばして振り返るのだ。

なのに……どうして、いつも……。

流れ続けていた曲が急にとまり、霧子をはっとして携帯に手を伸ばした。

液晶に表示された数字は五時七分。

もう家を出ないとバスに間に合わない。初日から遅刻しては印象が悪くなる。

そのこと自体はまったく気にならないのだが、これからの「遊び」のことを考えれば

余計なマイナス点はつけない。

若槻市、坪内総合病院救急外来の夜間当直医のアルバイト。これが今日からの仕事だ。

アルバイトといっても医師の時給は同じ時間帯のコンビニ勤務の約

十倍の時給なので、

贅沢をしなければ週四日の勤務でも十分に暮らしていける。

キャメル色のコートを羽織り、半透明のごみ袋を片手に玄関の扉を開ける。

耳に流れ込んできたさらさらという水が流れるような音は竹の葉ずれだ。

「もとは日本庭園だったんですよ。ただちょっと空き家だった期間が長くて

手入れが行き届かなかったんです」

約一か月前、多少家賃は高くて構わないから静かな一軒家を借りたという希望する霧子に、

不動産屋は熱くもないのにひっきりなしにハンカチで額をぬぐいながらこの家に案内した。

築50年の平屋。リフォームはしてあるというが台所や風呂場など水回りはふた昔前くらいの造りで

いかにも使いにくそうだった。

窓が少ないせいだろうか家全体が薄暗く、襖を外せば部屋同士が繋がる構造で隙間風もひどい。

「ははは、さすがに女性がお一人で住むのはちょっと寂しいですよ  
ね」

無表情に部屋と庭を交互に見まわす霧子に、不動産屋はことさら大きな声で笑いながら

ハンカチをせわしなく動かした。

「あれは、蔵かしら」

竹林に半ば埋もれるように建っている白壁の建物を指差すと、不動産屋のハンカチの動きがますます激しくなる。

「あ、あれはー。そのうち必ず大家さんを説得して取り壊させますから、その、何にもはいっていないんですよ。だから泥棒の心配もないし。でもあれですね、やっぱり台風がきたらこわいでるよね。

大丈夫、他にもっと良い物件が」

「決めたわ」

「はい、じゃあ次のところをお見せしま……」

「決めた、ここ借りるわ。あの蔵も自由に使っているのかしら」

「次は日当たりも良いですよ。ちよつと隣との距離が近いのですが、目をそらしながら喋り続ける不動産屋の脛に霧子は肩からかけていた小さなハンドバックを思い切りたたきつけた。

携帯電話と財布しか入らないくらいのそれにまさか重さ2キロの鉄の塊が入っているとは思うまい。

素早く動かせば後ろからならめったにきづかれない。

悲鳴を上げて蹲る不動産屋の耳元に大丈夫ですかと優しく囁き、霧子は改めてこの家を借りると続けた。

地面に降り積もった笹の葉はブーツの下でサクサクと雪のような音を立てる。

ここがもとは日本庭園だという不動産屋の言葉は嘘ではないらしく梅や皐月、さらに苔むした岩などが枯れ落ちた葉にうずもれるようにある。

この屋敷の持ち主は竹の強靱すぎる繁殖能力を知らなかったのか。見た目で全てを判断してはいけないのは人も植物も同じようなものだとかすりと笑いながら、

蔵の扉につけられた南京錠をあける。

重い扉は厚さ10センチはありそうだ。渾身の力でひいてもゆるゆるとしか開いていかない。

なるほど、蔵が昔の金持ちの象徴だったわけだ。分厚い扉と壁で中の物を災いから守り、そして……

「都合の悪い物を世間から隠す……元氣、田口さん」

奥の暗がりからひゅーひゅーと細い音がする。手にしたビニル袋から懐中電灯を取り出して

スイッチを押すとぼんやりとした光の輪の中に浮かび上がったのは、黒光りする鉄の檻。

獐犢で大型の犬用の物だが、こういうものがネットで手に入るとは

行きすぎたペットブームとやらも  
悪くない。

「前田先生」

しわがれ、掠れた声よりもひゅうひゅうと調子外れの笛の音のような呼吸音の方が大きく聞こえる。

大型と言っても犬を入れる檻の中では人は立ちあがることは出来ない。

しゃがみこんで胸も恥部も露わにしたまま、田口康子は太い鉄棒を一心不乱にゆする。

「あら、ずいぶんと身軽に動けるようになったわね。ダイエットの成果かしら」

「だして。お願いここから出して」

耳障りな音を立てて鉄棒がゆれる度に、弱い明かりの中で赤い物が飛び散る。

23歳、若さがたつぷりとつまっている田口の肉体はあちこちが無残にもえぐり取られていた。

太もも、腕、臀部、ある所は浅く、ある所は骨が見えるほど深い傷は彼女が動くたびに赤黒い血が吹きだす。

「でもあんまり動きすぎると倒れちゃうわよ。止血が十分じゃないから血が止まらない」

「だして、だして」

顔をゆがめて叫び続ける田口に霧子はくすくすと笑い声を上げる。

……前田先生の笑顔ってさあ、なんというか偽物っぽくない？ 背中にチャックあったらどうしよう……

ダイエットがしなきゃが口癖なのに、ナースステーションで暇さえあれば

飴やクッキーをつまんでいた看護師。

特に何をされたというわけでもなかったが、偽物の笑顔というのが霧子の心にきりりと爪を立てた。

「さーて体重測定ですよ。田口さん。目標体重になればここから出

れますからね」

昔、鏡を見ながら喉から血が出るほど練習したお陰で身につけるとができた優しい女医さんの声と表情で、檻の片隅に置かれたヘルスメーターを指差す。

「出られる」という一言にくちゃくちゃに歪んだ田口の顔に一瞬だ  
が笑みが浮かんだ。

なんだ、もう壊れかけているのかつまらない。

そつと溜息をついて、霧子はビニル袋に右手を突っ込んだ。田口がヘルスメーターにしゃがみこむと、デジタルが点滅し49と表示される

「残念、あと一キロですね。もう少し削りましょうか」

田口のひつという短い悲鳴は、振り下ろした肉切り包丁の風切り音にかき消された。

鈍い音と共にあがった赤黒い水流を寸での所で避ける。これから仕事なのだ。汚されても困る。

「乳房つて両方で丁度一キログラムなんですつて。ああ、看護師だからこのくらいはしっているわよね」

ぽつかりと赤黒い二つの穴が開いた胸を数度大きく上下させた後、笑ったような表情で田口はゆっくりと後ろに倒れた。

「田口さん。おめでとうダイエツト大成功ですね。ってもう聞こないか」

霧子は軽く肩をすくめ、おわん形の肉の塊を無造作に投げ捨てる。冬だから朝まで放っておいても匂うことはないだろう。

本当に土蔵は便利だ。防音仕様の部屋よりも音が外に漏れない。田口はここに監禁された頃朝から晩まで助けてと叫び続け

ついには喉を壊してしまったというのに近所から苦情は一つもなかった。

十日間、まあまあ楽しめた部類だろう。口笛を吹きながら手ぶらで土蔵を出る。バスの時間まであと7分。急ぎ足で歩けば間に合うだろう。



「すみません、間違えました」

医局の扉を半ば眠りながらあけた佐々木は、白衣を着た女性の姿を見て慌てて頭を下げた。

今年も残す所半月を切り、いつにもまして忙しい坪内総合病院救急外来。

1年目の初期研修医の佐々木は一時間眠っては急患に叩きおこされるところを繰り返していたため、かなり疲れていた。

先ほどの夕方の回診もベッドサイドに立った瞬間に記憶が途切れ、指導医の片に肘で小突かれてようやく我に帰るという有様。

だからついに帰る場所まで間違えたのかと頬が熱くなった。と

「あー、佐々木君。紹介するよ」

救急科長の小鉢医師の苦笑交じりの声が女性の後ろから聞こえる。

「え、えっと紹介するって」

「こちら前田霧子先生。今日から週四回で夜間当直を務めて下さる」

「え、あ、そ、そうですか」

「よろしく願います。佐々木先生」

霧子が頭を下げると、背中で束ねられたまっすぐな黒髪がさらりと涼やかな音を立てた。

切れ長の一重の瞳に筆の先で描いたような小さな唇。グラビアなどを飾る美女とは

まったく異なった美しさをもった女性だ、と

佐々木は思い、また頬が熱くなるのを感じた。

「あ、あのこちらこそ」

ぎこちなく頭を下げると、ずっと体の脇を微かなよい香りが通過して行った。

「随分美人が来たなあ」

入れ違いに医局にやってきた片医師が、短い口笛を吹く。

「交通事故の急患を見て、気絶しなきゃいいけれど」

「片君、それは大丈夫だろう。前田霧子。36歳専門は整形外科。数年前まで東京のN病院に務めていたそうだ」

「へえ、何度もその手のテレビ番組に出ている有名どころじゃないですか。いつそ常勤になつてもらえばいいのに。重宝するでしょう口ばっかひのひよっこより」

どっさりとインスタントコーヒーの粉末を入れたマグカップにポットの湯を注ぎながら片が皮肉げにつぶやくと、小鉢は手に持っていた霧子の履歴書を引き出しにしまいながら軽いため息をつく。

「やれやれ、片君は案外根に持つんだな。放っておけよ外部の石頭なんか」

「放っておいて、減給されちゃたまりませんから。なにせあの方はこの病院の金庫番だそうですから。なあ、佐々木」

「え、は、はい」

いきなり話を振られて佐々木は戸惑いつつも頷いた。

二人が話しているのは、多分事務長の毛利和明のことだろう。中国地方を根城にした有名な戦国武将と同じ名字であるのが本人はご自慢のようだが、他の職員特に医師や看護師は彼の大分寂しくなった頭頂部の様子に引っかけ「けなし」と呼ぶ。

これだけで毛利事務長がどういう風に思われているか察しくというものである。その事務長と片が派手にやりあつたのは一月半ほど前のこと。

「年末年始の当直を一人体制でやれと、どういうことですか」

「どうもこうも、救急外来はベッド数が15しかないじゃないですか。しかも常に二床は急患のために空けてある。一人で十分でしょう。本来なら常勤医すら一人でよい所を、小鉢先生たつての頼みで片先生を配置し、さらに初期研修医の派遣先にまでなっている。真つ赤々のお荷物科に院長先生は厚遇すぎる」

薄い胸をそらして滔々と得意げに喋る毛利と対照的に、片の顔から

はずっと表情が消えていく。

「小鉢先生、あれまずいですよね」

「ああ、相当頭に血が上っている証拠だ」

たまたまその場に居合わせた佐々木が固唾をのんで見守る中、片を身振りで制した小鉢が「よいですか」と毛利に向き直る。

「毛利事務長の言うことは理解できます。しかし、年末年始は市内の病院のほとんどが休診に入り重症な急患を受け入れる病院はうちと、白鳳大学の救急救命センターのみです。冬は体調を崩す人も多いですし、事故も増える。一人での当直は不可能です」

「ふむ」

腕組みをしながら毛利が頷いたので、小鉢はおわかりいただけましたかと安心したように続けた。が、

「それならオンコール待機で十分じゃありませんか。患者が来るかどうかはその時の状況次第。空っぽの診察室に医師が二人も待機している

必要はない」

「……ほう、オンコールねえ」

「片君」

黙っている小さく手を振る小鉢を無視して、片は続ける。

その好戦的な口調に佐々木は息苦しさを覚えた。

導火線が燃え尽きる寸前のダイナマイトを握ったらこんな気分になるのだろうか。

「っは総合病院では県内で5本の指に入る位の大きさだっけ言うのに、医師一人の給料を出し渋るのか。ただ働きをしろと面と向かって言われたのは研修医の時以来だぜ」

「誰がただ働きと言いました」

さすがにむっと来たらしく、毛利の口調がけわしくなる。しなびたへちまみたいだと片が例えた細い体が細かに震えだす。

「オンコールは休みの緊急呼び出した。当然何の手当てもないんだろっ。ここ5年の年末年始を考えれば、呼び出されない方が奇跡だ

ぜ」

「そういうことは赤字を解消してから言ってもらいたいものです。

片先生と小鉢先生お二人の給料分すら今は利益が出ていない状況で

……」

「なら手前が手伝え、この八……」

「片君」

さすがにまずいと思ったのか小鉢医師が睨みあう二人の間に強引に割り込んだ。

「毛利事務長。この件はいまここですぐに結論を出すわけにはいきません。どうか院長をまじえて

もう一度お話する場を設けて下さい。しかし、片先生の言う通り年末始の当直は一人では無理です。そこはご理解下さい」

そう言つて丁寧に頭を下げる小鉢医師に毛利事務長は「ふん、そのうち新聞誌面を飾らないように十分にご注意を」と捨て台詞を残して去っていった。

「ったく。新たに夜勤のバイトを入れて誤魔化しか。あくまでも年末年始常勤医の一人当直に拘りたいらしいな。あのへげは」

「……そうしたほうが色々都合がいいんだろう。賃金と労働時間の両面で」

机の上で両手を組み、その上に顎を載せて小鉢が呟いた。

「っは。俺達は警察や消防と同じです。いつ起こるかわからない事件や火事に備えて待機を欠かさない。それが何で理解できないんだ」

「外部の人間にはわからないさ、中々ね。昔は研修医がこんな役をすべて引き受けてくれたから、問題にもならなかったんだが」

その言葉に、佐々木はす、すいませんとともに口の中で謝った。「バカ、お前が謝ることじゃない。現場を知っちゃいない厚生労働省の役人のせいだ」

片が佐々木の後頭部をぱしりと叩く。

新研修医制度のお陰で、佐々木は医学部に半ば怪談のように伝わる過酷な従来の研修医生活を送らなくてすんではいるが、そのかわり

中途半端な改革のお陰でそこかしこに現れた歪みを、ちよくちよく目の当たりにする。

「ま、美人女医と夜を過ごすってのもわるくないよー。ベッドのある部屋で」

「……片君、口を慎みなさい。佐々木君、それが終わったら今日はこれであがつていいよ」

「は、はい」

佐々木は頷いて、記入していた書類を片付けるといそいそとロッカールームに向かう。

久々に家のベッドで眠れると思うとただそれだけで嬉しかった。

「お疲れさまでした……」

途中、病院を案内されている途中らしい霧子とすれ違い声をかけられた。

「あれ？」

会釈を返した時、佐々木は彼女のスカートの裾に赤黒い何かがかびりついているのに気づく。

「あ、え、えと」

だが、それを指摘しようと思っている間に、彼女の姿は廊下の角に消えてしまった。

続く。

## 二話

ブラインドの隙間から薄青い朝の光が差しこんでくる。

「もうひと踏ん張りだな、お疲れ様。初日なのに随分ハードな勤務になってしまったね」

小鉢医師が差し出してくれたコーヒーを霧子はすぐに手を出すことが出来なかった。

彼の言うとおり昨日は急患が三件たて続けにやってきたお陰でほとんど眠ることが出来なかった。

そんなことは初めてではなかったが、久しぶりの経験だったため思ったより疲れていたらしい。

どんな表情をつくってよいかとつさに判断がつかなかった。

しまった。一瞬ひやりとしたが、小鉢医師はそれを疲れのせいだと思ってくれたようだ。

「N病院でもこんな日はあまりなかっただろう」とスチールの事務机の上に

湯気の立つマグカップを置いてくれた。

「そうですね。N病院は三次救急でしたが繁華街はカバーしていませんでしたから」

頭の中にインプットした数百枚の表情のサンプルの中からやっとこの場に相応しい疲れているけれど、ほっとした笑みを選んで顔の上に忠実に再現する。普段より一呼吸遅い。家に帰ったら久しぶりに復習が必要なようだ。

そんなことを考えながら、熱く苦いコーヒーをすする。

この病院から三駅離れた場所にある猿若町は、戦前までは神社を中心とした門前町だったようだ

今は地方都市にありながら歌舞伎町と同じ位の知名度をほこる歓楽街だ。

ごく普通の居酒屋から、マニアックな趣味を満足させる風俗店まで

がひしめき合っているらしい。

トラブルは当然日常茶飯事。更に厄介な人々も多く、同じ地域を力バーしている白鳳大学病院救急救命センターなどは猿若町から搬送だと伝えたと、必ず満床だという答えがかえってくるというもつばらの噂だ。

昨夜はそんな街から二件の搬送があった。

一件は、喧嘩で怪我をした若者。もう一件はアルコール依存症が進んで静脈瘤が破裂したホステス。

どちらも治療が始まるまで酷く暴れ、しかもホステスは点滴をさす血管が十分以上見つからないほど体がぼろぼろだった。

「まあ、こんな夜ばかりではないよ」

対面の机に腰をおろし、心配そうにこちらを見つめる小鉢医師に霧子は大丈夫ですと頷いた。

今度は口元に自然に笑みが浮かぶ。

跳びこみの患者が多く忙しい現場。しかも運ばれてから数時間が経過しているのに未だ患者二人共家族がやってくる気配がない。

これは、思っていたより理想の職場かもしれない。

「やりがいがあります」

「そういつてくれるとありがたいよ」

小鉢医師がほっとしたような笑みを見せる。

言葉は便利だ。ほんの少し省略しただけで聞き手は自分の都合のよいように補足してくれる。

時計が七時半をまわると日勤の看護師や、常勤の医師達が出勤してきて病院は一気に騒がしくなった。

「それではお先に失礼します」

小鉢医師や片医師、さらに研修医の佐々木にも丁寧に挨拶をして医局を後にする。

ほうつと背後からため息が上がった。振り返らなくてもそれがマイナスの感情を含んでいないことが良くわかる。

ああ、本当に良い職場だ。

だれもいない女子ロッカー室にはいると堪え切れずに声をあげて笑いだしてしまった。

これなら、思う存分「遊び」を実践できる。昨日の疲れなどいつの間にか吹き飛んでいる。

家に帰る前にぶらりと猿若町を歩いてみよう。そうすれば具体的な計画が立てやすくなる。

さらに病院内、できれば事務方に思い通りに動く奴隷を作っておこう。

せわしなく考えをはりめぐらせながら、霧子は病院を後にした。

「へえ、前田先生って思ったより肝が据わっているんですね」

「女性で外科医だぞ。当たり前じゃないか」

今日の佐々木の朝一番の仕事は、片医師について患者の回診だ。

「……そんなもんなんですか」

今一腑に落ちないように首を傾げる佐々木の頭を片がカルテの挟まったバインダーで叩く。

「今のぬるま湯研修じゃわからねえよ。俺が研修医だった頃は一週間に一度家にかえれば

良い方だったからな。うつかり炊飯器に飯がはいっていたりするとそれはみごとなカビの培養地になっていた」

「は、はあ」

「わからない奴だな。つまりだなあ。前田さんは二年も三年もそういう生活に耐えたってことさ。

中々きついだろ、妙齡の女性にしちゃ。ん、昨日運ばれてきた患者さんか。どうですか御気分は」

「さいていよ。一杯やりたい気分」



土気色の顔にだらしく媚びるような笑みを浮かべた中年の女性に、佐々木はため息を片医師は

皮肉げな笑みを唇の端に浮かべた。女性がここに運ばれてきた原因は酒の飲み過ぎなのに。

「退院してから飲んで下さいね。佐々木。採血して検査にまわしておけ」

「え、まだだっただんですか」

「その場でとったやつはアルコールがしこたま混じっていて役に立たん、もう一度だ」

「はい」

話を聞いているのかいないのか、相変わらずへらへらと笑っている女性を見て

佐々木は空しくなってきた。

多分この女性は長いこと体調が悪かったのだろう。もしかしたら医師からアルコールをやめるように警告を受けたかもしれない。でも彼女は飲み続けた。その結果がこれだ。

「ま、アルコールは悪魔の水だ。魅入られる人間はたくさんいるのさ」

慰めるように片医師が今度は優しく佐々木の肩を叩く。

「前田先生、昨日一日で嫌になっちゃいませんか。喧嘩の人もきたんでしょう」

一通り検診を終えたが、珍しく今日はまだ患者が来ない。

「こればかりは願うしかないなあ。俺も早く美人女医と二人っきりの夜を過ごしたいぜ」

にやりと笑って片がコーヒーの入ったマグカップに口をつけた時、

「おいおい、それはセクハラじゃないか。片君」

皺だらけのハンカチで顔を拭きながら、小鉢医師が医局に入ってきた。

「小鉢先生、もう起きられたのですか」

「うん、少しは寝れたから大丈夫。佐々木君、コーヒーを飲むなら

ついでに僕の分も

入れてくれたらうれしいな」

「はい」

佐々木がコーヒーを入れていると、背後で

「で、どうでした。美人女医との熱い一夜は」

好奇心を隠しきれなさそうな片の声が聞こえてくる。

「片君、何度も言うが少し口を慎みなさい。……そうだな。少しづつランクがあつたと聞いていたが

手技の手際は良いし、的確だった。できれば常勤のスタッフに加わって欲しいほどの腕前だよ」

小鉢の返事に片がひゅう、と短い口笛を吹いた。

「それは頼もしい。いやあ今日から勤務が楽しくなりそうだ」

「まったく片君は始末に負えんな……。佐々木君も機会があつたら前田先生の手技を見ておくといい。

きつと勉強になる」

「は、はい」

急に話の矛先が向けられ佐々木は慌てて頷いた。

「いいかー、見るだけだぞ。声をかけるのは俺が先だからな」

何と答えていいかわからず、佐々木は曖昧な笑みを浮かべた。

以前ほどではないが、女性は苦手だ。

どんな人でも必ずそこに亡き妻の面影を探してしまう。

「片君、いい加減にしたまえ」

大きなため息をついたものの、小鉢の表情はいつになく明るい。

「はいと首をすくめた片も同様だ。

やはり一人医師が加わればそれだけ余裕が生まれるのだろうか。

年末年始の救急の忙しさを散々片医師から聞かされていたので良かったなと思う反面

自分が全く戦力外だったと言外に告げられているようで何とも複雑な気分だ。

床を見つめてそつと唇をかんだ時、

「先生方受け入れ要請です」  
看護師が慌ただしくドアを開けて戦闘開始を告げた。

「理想だわ」

まだ朝のひんやりとした空気が残った人気のない通りをぶらぶらと歩きつつ霧子は呟く。

先ほどから抑えようとしても笑みが浮かんでくる。

地方では随一といわれている歓楽街、猿若街。マツチ箱のようなちまちまとした雑居ビルや

プレハブに毛が生えたような戸建にはどれも縁を電球で飾ったときつい原色の看板がかけられて、

夜はさぞ華やかだろうと思わせる。

もつとも今は、そのどれもに古びたシャッターが下ろされまるで廃墟のようだ。

たまに瞬いている看板はそのどれもがホストクラブ。たまにすれ違う人々は

厚い化粧が崩れかけた派手で安っぽい服を着た女性か、うすつぺらな格好よさを纏った男性。つんと酸っぱい生ごみの匂いがビルの隙間から漂ってくる。

そんな中で仕立てはよいが地味なコートにパンツスーツの霧子は明らかに異分子だ。

「よう、あんたオキニの客と熱い一夜でも過ごしたのかい。うらやましいねえ」

ふいに頭上から下品なだみ声が降ってくる。ついと顔をあげれば金髪にきついパーマをかけた中年女が

にひひと啜え煙草で笑いながら窓を閉めるところだった。

首を傾げながら辺りを見回しても他に人の姿はない。

その代わり潰れた店から放り出したのか壊れたミラーボールが一つ

ゴミ置き場に転がっていた。

鏡のような表面に小さく映った自分の顔は頬が紅潮し瞳も濡れたように輝いている。

なるほど、情事の後だと見えなくもない。

たしかに、自分は欲情しているのかもしれない。くくつとついに声をあげて霧子は笑った。

水商売は懐が広い分無関心さも高い。ある日無断で勤め先に出てこなくなっても

誰も気にしないだろう。加えて金をちらつかせれば容易に自分がしかけたわなに

飛び込む連中も多いはずだ。

さあ、どうやって遊ぼうか。

ぞくぞくとした快感が背筋を脳天まで駆け抜ける。今日はしたみだけにしようと思ったが

耐えられそうにない。

卑猥な軽口を叩いた中年女が消えた窓のあるビルとその隣のビルの隙間には

ミラーボールの他にもゴミがうずたかく積まれている。

その中に石油のポリタンクが二つある。もしかと思いつつつま先でつついてみたら

ちゃばちゃばと音がした。

ふたを開ければつんと灯油の匂いが鼻をつく。

霧子はポリタンクを隠すように手早く周りにゴミを積み上げた。

この姿を見る人がいても早起きのホステスがゴミ収集所のあまりの乱雑さに

掃除をしている風に思ってくれるはずだ。

発泡スチロールのトレイがつまったゴミ袋の上に、紙ナプキンとおつまみの空き袋が入れたゴミ袋をおくとポリタンクが完全に見えなくなる。

仕上げに霧子はバッグから包帯を取り出すと半ばまでほどいてその

橋に火をつけた。

細く煙を吐いて燃えだしたそれをゴミ袋の隙間に押し込む。

あとは時間がたてばよい。あのゴミの真上には換気口のダクトが伸びていた。

灯油に引火して火柱が上がればそれはダクトを蛇のようにのたくって恐らく厨房に辿りつくだろう。

このビルの一階は居酒屋。

ビールに脂っこいつまみはつきものだ。この店の閉店は午前五時。

今の時刻は九時。フライヤーの油が冷めきっていないければよいがと思いつつ霧子はゆつくりとその場を立ち去る。女がいるだろう二階に掲げられた看板は「アキ子」。

本名なのかしら、源氏名かしらと考えながら。

霧子が家に帰ったのは十時半。少し遅くなってしまった。

今日は土蔵の死体を始末するつもりだったのに。

「まあいいわ、別に冬だし」

あとで殺虫剤を巻いておけばハエの発生は防げるだろう。

ゆつくりと風呂に入り、コーヒーを入れてテレビをつける。

画面に映ったのは燃えさかる雑居ビル。時刻は十一時半。地方ニュースの時間だ。

行方不明 スナック経営「鈴木明子さん」と書かれたテロップを見て霧子は本名だったのね。  
と呟いた。

続く。

### 第三話

「おや、兵ちゃんどうしたのさ」

佐々木が振り返ると、着物姿の久代がちんまりと立っていた。

午後三時、坪内総合病院の売店。といっても、見舞客用の花束から入院患者用の浴衣やタオルまであつかっているので、コンビ二なみの品ぞろえがある。

佐々木が眺めていたのは消臭スプレーだった。

「デート前のおしゃれかい」

にやりと笑う久代は、佐々木の養母のような立場の人で年齢もとうに五〇を過ぎているのだが、

表情や仕草には匂うような色香がただよっている。若い女性が好みそうな大胆な色遣いの着物も

実に粋に着こなしていた。

「そんなんじゃないよ。ちょっと服に匂いがついちゃって取れないんだ」

二時間前、昼休憩にいつておいでと小鉢医師が言った直後に受け入れ要請があつた。

「患者は30代〜40代の女性、胸部に2度熱傷。火災現場からよりの搬送ですから気管や肺の損傷も  
うたがわれます」

「おいおいおい。どう見ても二次の領域をこえてるぜ。白鳳大学の熱傷センターは？何をやっている」

片医師が問い返すと、洪い声がスピーカーを通してかえってきた。

「最初はそっちに受け入れ要請をしたんです。でもあの町からの搬送ですし、顔や手足は無傷だと

伝えたら満床だと……」

「わかった。受け入れる。片君、申し訳ないが皮膚科に一言入れておいてくれ。賀来先生は

「どうも苦手だ」

「いいですよ、その代わり明日昼飯奢って下さい」

片が内線ボタンを押しながら苦笑した。

「さて、佐々木君重度の熱傷患者は始めてだったよね」

「はい」

ずっと表情を引き締めた小鉢に、佐々木も背中中にひやりとした固い芯を通されたような気持ちになった。

学生時代に座学で熱傷についての授業は受けたし、軽度熱傷なら何度が治療の経験もある。

しかし、本来なら熱傷センターに搬送されるレベルの患者を生で見るのは初めてだ。

「小鉢先生、佐々木先生、救急車が見えました」

市川看護師のきびきびとした報告に小鉢医師が

「いくぞ、佐々木君」

と大股で歩き出す。佐々木は緊張で冷たくなっていく両手を握りしめて後に続いた。

「2分前に心拍数と血圧が急低下しました」

救命士が報告をしながらストレッチャーを引き下ろす。とたんに鼻を直撃した匂いに佐々木は危うく戻しそうになった。

すすで真っ黒になった顔と薄黄色の奇抜なデザインの服。一見するとどこに火傷があるかわからない。

「うかつに触るな、水泡が破けるぞ」

吐き気を堪えて患者に手を伸ばした佐々木を小鉢の鋭い声が制した。そこで初めて服に見えていた薄黄色のものが、熱による水ほうだとわかる。

「気管挿入、酸素濃度を測って。輸液開始」

処置室に待機していた看護師達が、小鉢の指示に従ってきびきびと動き始める。

薄いビニル手袋をはめた手が黒く焦げた服の残骸をかきおとし、水泡を破くにつれて匂いはますます

強くなる。

「佐々木君、少し下がりなさい。邪魔だ」

小鉢の言葉に従わざるを得ない自分が情けない。だが吐き気を堪えて涙で滲む視界では碌に患部すら

みえない。

ひどい痛みなのだろうか、患者は意識がないのに闇雲に手と足をばたつかせる。

「こりやまたひどい熱傷だねえ。白鳳大学に搬送しちやいなさいよ、早く」

場違いなほどのんびりとした声をあげて無精ひげをまばらにはやし、黒ぶちの眼鏡をかけた四十前後の医師が入ってきた。

「だから先ほども説明したでしょう、賀来先生。白鳳大の熱傷センターは満床だつて。俺や小鉢先生は専門外ですから先生に見ていただかないと」

続いて部屋に入ってきた片医師がうんざりした表情で言った。

「あ、そう。困るなあ。論文が進んでないのに」

困る困ると繰り返しながら、賀来医師はぐつと亀のように首だけを伸ばして患者を一瞥した。

「熱傷二度ぎりぎりだね。クリーム塗つてあそこの包帯をゆるくまいといてよ。どのみちそれしか

ここでは出来ないからさ。悪化したら白鳳大学に搬送だね」

ひょいと指差した先に積み上げられていたのはトイレットペーパーだ。

「その研修医。とつと動きたまえ。その包帯をとつてくる」

名指しされて佐々木は戸惑う。トイレットペーパーを包帯代わりにするなど習ったことはないが

最新の熱傷治療ではそうなのだろうか

「何をぐずぐずしている」

「賀来先生わかりました。後はこちらでやっておきますから、先生はひとまずもう結構です」



イライラと賀来医師に睨みつけられ立ちすくむ佐々木に小鉢医師が助け船を出してくれた。

「あ、そ。じゃ、もう呼ばないでね。僕は論文を書かなきゃならないんだ」

来た時とは段違いのスピードで部屋を出ていく賀来医師に、片医師が舌打ちをした。

「あ、あの本当にトイレットペーパーを巻いちゃっていいんですか」

「馬鹿、あれはあのド近眼の見間違えだ。本気にするな」

後頭部をぱしりと片に叩かれて帰って佐々木はほっとした。

「そういうことだ。クリームをぬったら胸部エックス線写真をとるから」

「お、俺にやらせて下さい」

ようやく佐々木は患者に触れる。じゅくじゅくとした皮膚は軽く指先が当たる度に体液が滲みだし、

患者が苦しげに呻いた。

「すいません、すいませんと心の中で謝りながら佐々木が患部に薬を塗り続けた。

「実はさつき熱傷患者を治療して……」

「もしかして、アキちゃんのことかい？」

「あき、ちゃん……」

誰だろうそれは。

「ほら、今日猿若町で火事があっただろう。あれは私の友達の店が入っているビルなのさ。

昼前に起きてテレビをつけたら火事のニュースが映ってびっくりしたんだ。アキちゃんが重傷って聞いて白鳳大学病院に問い合わせたんだけど、搬送されてないっていうからこっちに来たのさ。正解だったね。あの子は身寄りがないから、手続きやら入院準備やらを手伝ってやろうと思ってさ。ね、アキちゃんの具合はどうだい」

矢継ぎ早に尋ねる久代の顔を佐々木はまともに見ることが出来なかった。

患者は一応一命は取り留めた。だが、検査の結果胸部の火傷より気管支内の火傷の方が酷いことがわかり、今は熱傷センターのベッドが空くのを待っている状態だ。

佐々木の有様からアキちゃんの容態を察したのか、久代はポツリと「果物や飲み物なんかは、買っても無駄になりそうだね」と呟いた。

水の出が悪いシャワーを浴びていると、水音に混じって微かに

「Green・Green」のメロディが聞こえてきた。

もうこんな時間か。結局眠っている暇はなかった。さすがに鉛のような疲労が肩のあたりに重く感じられる。

今夜は少し仮眠をとらせてもらえないと厳しいと思いながら、風呂からあがりバスタオルで

濡れた体をぬぐった。

首のあたりにタオルを滑らすとジャリつとした感触がして、何かが背中を伝う。

どうやらまだ土がついていたらしい。

昼過ぎに土蔵をのぞくと早くも白くちいさなものがびっしりと田口の体にまとわりついていた。

ぐにぐにと皮膚の内側にまでもぐりこむそれが指の先を微かに動かし、まるで生き返ったかのような錯覚を覚えさせる。

「通夜というのは、皮膚の内側が虫に食い荒らされるのを見た人が早とちりしたせいであ

うまれたのかもね」

大きなシャベルで竹林の土を掘り起こしながら、霧子は傍らにおいた田口に話しかける。

少し掘るとすぐに育ち過ぎたタケノコのような地下系に当たって掘りにくいことこの上ない。

これは誤算だったと舌打ちしながらシャベルの先で地下系を切断しながら掘り進めていく。

殺人で一番問題なのは、死体の始末。40キロ〜60キロの肉の塊は持ち運ぶだけで一苦労だし

家庭用の冷蔵庫にはまず入り切らない。そして腐敗すれば恐ろしい悪臭とはえをまき散らす。

まあ、放っておけば最終的には茶色の液体と白い骨になるがそこまで待つ間に苦情が来るか、たとえ

トランクに詰め押し入れに隠した所で同じ部屋に住んでいたら精神がたえられまい。

しかし、逆に死体の始末さえ完璧にできる方法があれば、殺人は8割が成功したといえるだろう。

死体がなければ殺人罪の立証はとても難しい。

この庭はそれを余裕でかなえてくれる。埋めてしまえばよいのだから。でも、

ただ埋めるだけでは、安心できない。

二時間かけてようやく深さが1m程の穴が掘れる。そこに霧子は田口の体を無造作にけり落とした。

所々肉がかけ、白い虫にたかられた若い肉体は前衛的なオブジェのような格好で穴の底に横たわる。

その周りに石灰をまき、穴の半分ほどをつちでうめると今度はその上に猫の死がいを置いた。

前の持ち主が餌付けでもしていたのか、この庭には良く猫が来る。

ネコイラズ入りの水を夜置いておけば、朝には2、3匹が笹の葉に半ば埋もれていた。

こうしておけばたとえ何かの拍子にここが掘り起こされても大丈夫だ。

再びひたすら土をかけて地面を平らにならす。時刻はすでに13時

を回っていた。

急いでパンツスーツに袖を通し、リビングダイニングの散らかった机の上に置かれたバックをつかむ。

遊びが終わった後は何故かいつも猛烈に空腹になる。

三日分とおもって買ったベーグルの袋が空っぽだ。サーモンとクリームチーズの組み合わせは美容の大敵だと思いながらバス停まで早足で歩く。

そういえば、行方不明になったあけみさんはどうしたのだろう。コンクリートのビルは巨大な窯だ。

こんがりとした蒸し焼きになっているのだろうか。それとも何処かの病院のベッドの上で

痛みのにたうちまわっているのだろうか。

どちらにしても中々面白い暇つぶしだった。

「あ、前田先生。今晚は」

医局のドアを開けると、研修医が小さく挨拶をしてぺこりと頭を下げてきた。

たしか、佐々木兵衛とかいう随分古風な名前だったはず。しかし、それよりも彼の両頬に涙の後のようにはしる二本の傷痕のほうが印象的だ。何があったか知らないがあの傷を再びこじ開けたら面白そうだ。そんなことを考えながら、しかし表情はあくまでも優しげに霧子は挨拶を返す。

唇の両はしを微かに吊り上げてやると、佐々木は耳の先まで真っ赤になってうつむいてしまった。

今時珍しいほどの奥手かもしれない。

「今晚は眠れるといいわね」

つい面白くなって椅子に腰かけて胸を僅かにそらして見せる。白衣の間から覗く形良い双球に

ちらちらとした視線を感じた。

たかが脂肪の塊になぜそんなに引きつけられるのか。

男といういや人間というものは本当に訳がわからない。

「そ、そうですね。でも今はICUにね、熱傷の患者さんがいるから難しいかも」

佐々木の言葉に霧子は心中でにやりと笑った。

白鳳大学熱傷センターへの受け入れを待っていた鈴木明子がつけていた

酸素マスクが外れる事故で死亡したのは翌朝4時のことだった。

## 四話

「小鉢先生、どうでした」

出勤してすぐに院長に呼び出された小鉢医師が疲れた顔をして戻ってきたのは、もうすぐ昼になろうという時刻。

切羽詰まった口調で尋ねる片に、救急科の責任者は安心させるかのように僅かな笑顔を見せた。

「事故、ということで落ち着いた」

その言葉に片と書類を書くふりをして耳を澄ませていた佐々木は安堵のため息をついた。

転院まちの鈴木明子の急変に看護師が気づいたのは午前三時三十分。傷が痛むのか患部にまかれた包帯をむしり取るうとするので両手を抑制していたのだが、いつのまにかそれがほどけていたのだ。

異常を知らせるアラームはなぜか音量が最小限に絞られていた。

しかし、ナースステーションでもICUに入っている患者に異常が起こればアラームが鳴る仕組みになっている。

普段だったらずくに看護師が駆けつけることができただろう。だが昨日は午前三時に交通事故の急患が入り当直の片医師と前田女医、さらに看護師のほとんどがその治療にかかりきりになっていた。

その上なぜかよその科に入院していた老人が救急科へ迷い込んできたため待機していた看護師が送り届けていたため、アラームが鳴り響いた時、ナースステーションは全くの無人だったのだ。

「こういつちやなんですが、昨日は間が悪すぎた」

呟いた片に小鉢も頷く。

「ああ、ついでに言えば鈴木さんに身寄りがなかったこともよかったです。ただし、毛利事務長が大分おかんむりらしい。しばらく風当たりがきつくなるから覚悟してくれ。佐々木君も申し訳ないが何か言われたらその場は口答えしないではいいと頷くだけにしていって欲

しい」

佐々木は罪悪感と失望感の入り混じった苦い気分でわかりましたと頷いた。

事故と認められたとはいえ、もう少しだけ皆が気をつけていれば防げたことだ。

だが、それを口に出してどうする。まだ僅かな期間ではあるが今までの日々を振り返ればここが戦場のような職場であることは身にしみてわかる。全員が百パーセントの力を出して働いているのにそれ以上のことをしろということとはできない。

だが、火事で重傷を負い誰にも看取られずに息を引き取った拳句、遺族がいないことを「幸運」と言われてしまった鈴木明子はあまりにも哀れすぎる。

そんな風に悶々としていたせいなのか佐々木は午後一杯ささいなミスを繰り返して、その度に指導医の片から嫌味たっぷりの注意を受けた。

「最悪な日だなあ」

午後五時半、とつぷりと暮れた窓の外を見ながらぼんやりと呟く。机の引き出しに放り込んである私物の携帯には、久代からのメールが何通かきていた。

内容は想像がついたし、返事が必要な事はわかってはいるが携帯を開く気分になれない。

「こんばんは」

涼やかな声と共に前田霧子が医局に入ってきたのはそんな時。

「こ、こんばんは」

今日の彼女は冬だというのに白衣がなければ胸が半ば見えてしまいそんな大胆な服を着ている。

清楚な美貌にはそぐわないが、妙に色気漂うその姿に佐々木は瞬時に熱を出したような錯覚を覚えた。

「昨日は大変だったわね。その後どうなったのかしら」

そんな佐々木の様子など気にも留めない様子で優しく尋ねてくる前

田女医に時々つかえながら事故として片付けられた経緯を説明した。

「かわいそうね」

話が終わると前田女医はポツリとつぶやいて、白衣のポケットからハンカチを取り出し目頭を押さえる。

「ま、前田先生、あ、あの」

佐々木はとまどった。三十半ばで東京の救急病院での勤務経験もあるならばこの手の話は決して珍しい物ではないだろう。

どんな悲惨な話でも繰り返し返せばいつしか慣れてしまうもののな。

「ごめんなさい、私涙もろくて」

ハンカチで目元を抑えながら前田女医は笑おうと努力したようだ。

口角がもちあがろうと震えているのが不思議と可愛い。

「鈴木さん、最後は苦しまずに逝くことができたかしら」

「え、ええ。き、きつとそうです」

こくこくと佐々木は頷いた。自分以外にも鈴木明子の死を悲しんでくれる人がいる。

それがわかったただけでさっきまで胸にたまっていた重苦しい思いが急に吹き飛んだ気がした。

「お先に失礼します」

すつきりとした笑顔で医局から出ていく研修医を霧子は吹きだすのを必死でこらえながら見送った。

いつも持ち歩いているハンカチには少量のミョウバンがしみこませている。

目元をこすればあつというまに涙を堪える健気な女医になれる。少々の痛みは縁起の良いスパイスだ。

憐れみの言葉を紡ぎ、涙を見せればどうして他人は自分を良い人だと思ひこむのだろう。



口先だけなら簡単にいつわることができるのに。涙など瞳を守る生理現象に過ぎないのに。

鈴木明子の酸素マスクを外したのはもちろん霧子だ。命に別条がないようなので退院した後にあの土蔵に監禁してやろうと思っていたが熱傷センターへの転院待ちだと聞いて、気が変わった。

ベッドに横たわり時折苦しげに抑制された両手を動かす鈴木明子の頭部にはあの金髪は一筋も残っていない。

「やっぱり日本人は黒髪でなくっちゃね。それに苦しそうだわ。ほどこいてあげましょう」

母を見舞う娘のような優しげな口調でつぶやきながら、霧子は抑制帯をほどいた。

布団をかけておけばしばらくは誤魔化せる。ついでに酸素吸入器のアラームの音量を限界まで下げておく。

「明子さん。かけをしましょう。これであなたが死ななければあなたの勝ち」

そう言い残して霧子が医局に戻ったのは午前二時。その一時間後に交通事故の患者が搬送され、しばらくして内科から入院患者が迷い込んできた。

これは霧子が隙を見て内科から連れ出したのだが、交通事故は偶然だ。とても運がよいことだ。

「かけは私の勝ち」

医局に一人残された霧子は呟く。今日から夜間は一人当直だ。

小鉢医師からは何かあったらすぐにコールをするように言われたが、多分受話器を握ることはないだろう。

遊び場は独占したいし、寒い冬に死者が増えるのは仕方がない。

その日の当直は昨日までの騒ぎがうそのように静かなものだった。

看護師達はほっとした様子でナースステーションでそれぞれの仕事についている。

霧子も昨日から寝ていなかったこともあり、椅子にもたれているうちについとうとうとしていた。と、

「こまります、今は誰も先生がいらっしゃいません」

困惑したような声が廊下から聞こえてくる。

何だろう、とまだぼんやりとした頭で霧子は考える。

まだ勤務三日目だがこの看護師達がみな肝が据わったツワモノぞろいだということは理解できた。

そんな彼女たちのうちのどれかが、これほど戸惑っているということとは近頃はやりのモンスターペイジェントでもやってきたか。

丁度いいと霧子は舌でちろりと唇を湿らせる。一気に眠気が吹き飛んだ。

又新しいおもちゃが手に入りそうだ。

だがドアの隙間からこっそり廊下の様子を覗き見て、あいつはと唇をかんた。

背中をつつと汗が伝う感触が酷く不快だ。こんな感覚を覚えたのは何年振りだろう。

蛍光灯が青白い光を投げかける廊下に薄笑いを浮かべながら看護師と話しているのは中年の男だった。

くたびれたスーツに皺のよったズボン、それにぎらぎらとした光を浮かべた上目遣いが野良犬を連想させる。

「だからよう、誰でもいいんだよ、ちよつと話を聞かせてくれりゃあそれで」

煙草の吸い過ぎか酒の飲み過ぎか、嗚れ声が酷く耳触りだ。

男の手には名刺らしきものが握られていて、それを看護師に押し付けようと躍起になっている。

「北川、雄二」

医療ジャーナリストを自称する売文屋。まさかこんな所で再開するとは。

「あれえ、先生がいるじゃないですかあ」

うまく身を隠していたつもりなのに、北川は霧子の方を見てにやりと黄色い歯をむき出して笑った。

## 五話

「いやだなあ、そう嫌わないうでくださいよう。私はねただちよつとお話を聞きたいんです」

廊下の長椅子の端にいやいや腰を下ろした霧子の隣に、北山は当然のように座った。

股を必要以上に大きく開いているため、片膝が霧子のそれとぶつかりそうだ。貧相な体の中で

垢じみてしわの寄ったYシャツに包まれた下腹だけがだらしくふくらんでいた。

「いやあ、お綺麗ですね。失礼ですが女医さん一人で当直とは随分と薄情な病院じゃないですか。」

「ここは確か猿若町も力バーしているんですよ」

ねちねちとまとわりつくような喋り方をしながら、じりりと間合いを詰めてくる。

膝の上にさりげなく置かれようとしていた手を霧子は勢い良く振り払った。

「つつ、威勢がいいねえ。やっぱし頭のいい女性は鼻っ柱も強いみたいだ。」

「いいですねえ。好きですよそういう人だから先生教えて下さいよう。この病院で今朝患者がなくなっただしょう。」

あれ、医療ミスの可能性がありますよね」

大げさに手を振りながらも上目づかいにこちらを見つめながら舌で上唇を湿らす北山の姿に

霧子は改めてひどい嫌悪感を覚えた。

ここ数年、マスコミの医療従事者に向ける目は厳しいを通り越して半ば弾圧の域に達している。

北山はそれを利用して小金を稼いでいるドブネズミのような輩だ。細心の注意を払っていても予期せぬ患者の急変を無くすことは出来ない。

まして、一刻を争う患者ばかりが運ばれてくる救急科では一瞬の判断の遅れが

生死をわけることは珍しくないのだ。

北山はそういったもしかしたら助かったかもしれない患者達の話はどこからか嗅ぎつけては、

取材と称して病院にやってくるのだ。

そして、今のようにねちねちのまとわりつく。

「ねえ、先生。あの患者もしかしてこうすれば助かったんじゃないですかねえ」

「ほら、怖いですねえ。この病院は遺族との話し合いがこじれて結局裁判ですよ」

裁判とバッシングに神経をとがらせている病院が彼の要求に従うまでこれ続けるのだ。

北山のせいで医者や看護師をやめざるを得なかった人も一人や二人ではない。

そう……あの時も。

「まだ、こんなことを続けているのね」

「え、いやだなあ私は先生と初対面ですよ。こんな美人一度あったら絶対に忘れませんって」

霧子の弦きに北山はや二臭い息を吐きながらぐへへと笑った。

そうか、この男私を覚えていないのか。

言葉を交わしたことはないが、北山が取材という名の強請りにあの病院にやってきた時ほとんど同じ部屋にいたのに。

まあ、あの時は髪も短かったし……それに。

「ねえ、先生聞かせて下さいよう。猿若町から運ばれてきた患者。あれ、実は命に別状はなかったんじゃないんですか」

霧子の思考は、いつのまにかまた膝へと伸びてきた北山の指に中断

された。

太く硬そうな毛が生えたそれは若葉を食い荒らす毛虫のようで、

霧子はさっきよりも強くそれを振り払った。

そのままお話することは何もありません、お帰り下さいと背を向ける。

「そうかい、あんた後悔するぜ。これだからお高くとまった女は嫌いなんだよ」

北山ががらりと口調を変えた。どすのきいたそれは気の弱い看護師なら

泣き出してしまいそうなほど凄味がある。

それはきつとこいつがこういうことをやり慣れているせいだろう。だが

残念ね

後ろ手に医局の扉をしめながら、霧子はほくそ笑んだ。

北山にとっては病院が丸々と太った羊の群れに見えるのだろう。だが今回の羊の群れには

一匹ジャッカルが紛れ込んでいる。

たまには、狩られる立場になるのもいいでしょう。

ただし、とられるのはお金よりもっと大切な物かもしれないけれど。廊下ではまだ北山が騒いでいるらしく、汚いダミ声が響いている。

そんな中で霧子は小さなあくびをするとソファにもたれて目を閉じた。

「大体ですね、猿若町の患者なんか受け入れるからこんなことになるんですよ」

スチールの机にヒステリックに両手を叩きつける毛利事務長に佐々木だけでなく小鉢も片も

うんざりした顔になった。

時刻は午前9時。急患の運びこまれる気配はなく。

ICUも満床ではあったが全員容態は落ち着いている。

普段ならばゆったりと流れる時間の中、後回しにしていた仕事を片付ける貴重な機会なのに。

「聞いておられるんですか、先生方」

毛利事務長の声が一オクターブ高くなる。

「聞いているよ、でもそんなこと出来るわけないでしょう」

ため息をつきながら片が首を振った。

「白鳳大学病院だって、あからさまに搬送を断っているんだ。うちが可能な限り受け入れなきゃ

救急車は現場から動けないぜ」

「それがなんだというんです。リスクがある患者を受け入れればあんな三流記者がつけいる

隙もなくなるはずです」

「そうやって今度は患者を見殺しにした病院とバッシングを受けるのか。

俺はそっちの方がごめんだね」

「片先生!!」

「毛利事務長」

今まで黙っていた小鉢医師がゆっくりと立ち上がりようやく口を開いた。

「な、なんですかね小鉢科長。私はこ、この病院のためをおもってこそ」

クロアチア人を祖父に持つ小鉢の身長は180センチをゆうにこえる。

163センチの佐々木よりも小柄な毛利事務長からすれば大人と子供のようなものだろう。

今までいせいのよかった口調がきゆうにたどたどしくなった。

「前にもいいました通り」

毛利を見下ろすような姿勢で小鉢は話を続ける。

「この問題は私達で即決できるような物ではありません。どうかお引き取り下さい」

決して大きくない、むしろ穏やかな口調であつたが毛利は額に汗をにじませながらうなるばかりだ。

「こ、小鉢先生なんかすごいですね」

「だろ、あの人怒らせたら怖いんだ」

ひそひそと囁き合う佐々木と片。

「こ、これはぜひと、としあけの全体会議に議題として提出します。お、覚えておいて下さいね」

捨て台詞を吐いて毛利事務長が去っていくと、小鉢は肩をすくめた。「やれやれ、喧嘩を売ってしまったな」

「喧嘩じゃなくて脅しでしょう。でも厄介な相手に目をつけられましたね」

「ああ」

「え、えっと」

今一話についていけずに佐々木はとまどう。

今朝、前田女医からは北山というフリーライターが取材に来たと告げられただけだ。

なぜ皆こんなにぴりぴりしているのだろう。

「〇病院の産婦人科事件は知っているか？佐々木」

ふいに片が尋ねてきた。

「え、あ、はい。確か緊急搬送された妊婦が手術ミスで亡くなった事件でしたよね」

「そういう風に報道されちゃったんだよ、あほう」

片がぼんと佐々木の頭に丸めた医薬品のカタログを振りおろす。

「あれは、〇病院が妊婦のかかりつけ医でなかった上に前置胎盤というめつたにない症例

だったんだ。たとえどんな医師が手術しようと思からなかったはずだ。それをさも病院のミスのように

かき立てた最初の記者が北山なんだよ」

小鉢が再びため息をついた。

「……そうだったんですか」

ようやく毛利事務長が血相を変えて跳びこんできた理由がわかった。あの事件が起きた時、佐々木はまだ医学部の学生だったがその年から産科を志望する学生が急激に少なくなったと教授が嘆いていたのをよく覚えている。

執刀した医師はその後裁判で無罪が確定したが、二度とメスを持たないと宣言したとも聞いている。

「まあ、ああいう野郎は鼻だけはきくから、どっかから昨日の一件を聞きつけておどしたんだろうさ。」

まったく、なんで俺達がびくびくする必要があるんだ」

腕を組んでむくれる片に、小鉢はしょうがないと疲れたような表情で答えた。

「医者が神様だと思いたい人がこの国には多すぎる」

……部屋が空気がまるで鉛のように重くなっていく。

佐々木はそれに耐えきれず、トイレに行くふりをして医局を出た。

続く



## 六話

「ねえ、……ちゃん。確かにこの仕事は女性にとっては辛いかもしれないわ。でもね、自分の手で他人の命を救えるのよ。」

そのやりがいと比べればこの位の辛さは何ともないわ」

優しい声と微笑みに、霧子はひじの内側を軽くすぐられたような甘いこそばゆさを覚える。

なんで、この笑顔を私だけに向けてくれないの。なんで、皆と私を同じに扱うの。

笑顔を見る度に甘い感覚と怒りで身体が裂けてしまいそうになる。自分の想いを言葉にしたら、この笑顔はもう二度と見られない。それが判るような年になるまでこの人と出逢わなかったのは幸運なのか不幸なのか。

「あらあらどうしました」

扉が開く。見知らぬ人が入ってくる。自分に向けられていた笑顔がその人へと向けられる。

やめて、やめて、なんであんなに、名前も知らないあんたが笑顔を向けられるの。

もうダメだ、ならいつぞ。

白衣の背に手を伸ばした所で霧子ははつと目を覚ました。

畳を敷いた10畳ほどの和室の片隅で携帯電話がgreen・greenを奏でている。

確か寝る時は枕元に置いておいたはずだが、眠っている間に弾き飛ばしてしまったのか。

苦笑しながら起き上がると腰のあたりが微妙に痛い。安物の固い布団を敷いているのがわるいのだろうか。

でも、ベッドは手で持って運べないから我慢するしかない。

トントンと腰を拳で叩きながら襖を開ける。クローゼット代わりにしているそこには出勤用のスーツが二着とジーンズそして

全国に店舗を展開している衣料品店のトップスが三組入っているだけだった。

仕事をしている成人女性としてはあまりにも少ないが、これで特に不自由したことはない。

一歩外に出れば金さえ持つていれば服くらいいくらでも手に入る。

それに、何かあった時は

荷物が少なければ少ないほど行動が素早くなるものだ。

黒いナイロン製のボストンバック。女性が持つにはそっけなさすぎるそれは確か中学校の修学旅行用に学校指定の店で買ったものだったはずだ。

規則でがんじがらめに縛りあげていれば子供がまっすぐに育つと信じられていた愚かしくも懐かしい時代を象徴するようなそれにはいる分が彼女の全財産だった。

それにしても、と押し入れからいつも着ているものよりさらに地味、むしろやぼったいと言った方が相応しいこげ茶色のスーツを取り出す。

それを着た自分を鏡に映して見れば、起きぬけの腫れぼったい顔も手伝って別人のように老け、疲れ果てて見えた。

……似ているかも。

指先でひんやりとした鏡の表面を自分の頬に沿ってなぞりながら霧子は口の中で呟く。

あの人も、本当は美しい顔をしていたのに自分を飾るということは一切しなかった。

髪は手入れが楽というだけで、伸ばしっぱなしのストレートをヘアゴムでくくっただけ。

普段は穴のあいたジーンズに洗いざらしのコットンシャツで、改まった場には成人式の時につくったという型の古いスーツだった。

こんな人だから、誰も気づくことはないと思ったのに。

でも、草むらの中に放られていようとダイヤの輝きは失せないようにどんなにやぼったい髪形や洋服もあの人の魅力を隠すことは

できなかった。だから、自分は。

ふっと音楽が途切れた。いつのまにか部屋の中には夕暮れの紅色の光の代わりに夜の闇が忍び込み始めている。

あんな夢を見たせいだ。改めて念入りにやぼったさを演出しながら霧子は思った。あの人のことを考えるといつもあつという間に時間がたつ。

そんなあの人を、苦しめた北山のことを考えると胸の奥がざわざわとする。

彼が坪内総合病院に取材と称して恫喝にやって来た日から二週間が過ぎていた。

12月も半ばを過ぎ、町はクリスマスに向けて一日ごとにきらびやかさを増している。

身支度をおえた霧子はポストに突っ込まれていた新聞を読みながら眠気覚ましのコーヒーを啜る。

相変わらず世の中は悪いニュースが多いようだ。

一向に回復しない景気。企業の不祥事。迷走し続ける政治。世界各国で毎日のようにおこる紛争。

誌面をめぐっていくとテレビ欄の真後ろ。三面記事といわれる場所にわずか数行「カラカラ天気が原因か、猿若町で火事多発」

と書かれていた。なるほど、確かに今年の冬は乾燥している。もう一ヶ月近く雨が降らずお陰でインフルエンザが大流行の兆しを見せていた。

病院にも高熱を出してせき込みながらやってくる患者が途切れることはない。

でも、この火事は天気のせいではない。火事多発を埋め草記事につかった記者はそれが実は一人の人間が放火したせいだという事実を知ったらどうという顔をするだろうか。

薄笑いを浮かべて霧子は冷めかけた苦いコーヒーを啜る。北山はハイエナのような男だけあって  
なかなか用心深かった。

自分が恨みをかっているという自覚があるのだろう。だから、いつもより慎重にわなをしにけることにした。でも、丁度食べごろの果実を目の前にして

手をださずにがまんすることができなかったのだ。

直接手で命を摘み取る快感はないが、炎が全てを焼きつくしていく様を見るのはそれなりに楽しい。

あの町は消防法など守っている店の方が少ないから死者や重症者がその度に出るのもわくわくした。

猿若町で地味な若い女が明け方に徘徊するなど目立ちそうだが、たった一枚の白衣がその違和感を消してくれる。

あの町はその日暮らしを続けてそのまま年老いてしまった人間も少なくない。

無保険で金もない哀れな老人の「今」だけを見て可哀想と野良猫にえさをやるような感覚の医療従事者がいるのだ。

それを装えば、どんな汚い路地裏を歩いていようと皆何も思わない。なぜ、唯の白いだけの上着に皆そこまで無防備になる。

霧子はそれだけが不思議だったが、まあ、今は深く追求することはやめておこう。

「今日が、しあげ」

マグカップを洗って家をでる。いつも病院へ向かうバスではなく駅に向かうバスにのるためだ。

今日の目的地は猿若町。ほぼ毎日徘徊しているのに着飾った艶姿を見るのは初めてだ。

電車が最寄駅に近づく。暗闇の中、まるで浮島のように色とりどりの明かりが輝いている場所がある。

あそこが、今の私の遊び場。ああ、なんてきれいなのかしら。

始めてここに来た日のように頬を僅かに紅潮させて、霧子は男性客に混じって電車を降りた。

続く

## 七話

子が店のドアを開けるとかろうじて手元が見えるくらいに調節された照明の下、

生温かい空気がねっとりまとわりついてきた。

猿若町のメインストリートから一本入った路地に面して建てられた古い雑居ビルの一室にあった。

都会の歓楽街と同じように、この街も大通りには全国展開をしている居酒屋チェーン店や

値段の高いキャバクラなどが軒を連ね、路地の奥にはいつていくほどにそれが値段が安い

うらぶれた飲み屋やアブノーマルな趣味を満足させる店に変わっていく。

つまりこの店は表通りに看板を出すほど一般的ではないが、人目を忍んで出入りするような店でもない。

入店する人間の大部分が遊び慣れて少しスリルを味わいたくなった類だろう。

2週間通い続けたせいで暗がりの中でも何がどこにあるのかはだいたい見当がついている。

ぎしぎしと軋むソファに腰を下ろすとすぐに黒服が小さなキャンドルをテーブルの上に置いた。

小さな炎が霧子の全身を仄かに照らす。と、幾つもの視線が全身を舐めまわすのを感じた。

ソファからは暗闇に塗りつぶされて見えないが、この店は4畳半程の個室が数個連なったつくりになっており、隣の部屋との壁の一部がくりぬかれそこに目の粗いすだれがさがっている。

廊下と部屋の壁の一部も同じようになっていて、視線はそこから注がれていた。

ハブニングバーと名付けられたこの形態の店は、客同士に「思わぬ

出会い」を提供するというコンセプトらしい。

一人客をナンパするのもよし、カップル同士の痴態をのぞき見るのもよしというもので

極端に照明が暗いのも、女性客だけ顔を下から照らすようにキャンドルが置かれるのも

（おもに男性客が）素性を知られずにスリルを楽しめるよにという配慮だ。

この店の奥には、セックス用の部屋もあるが双方の合意さえあれば連れだつて店を出ても何ら不思議はない。

すぐに霧子の隣にどさりと誰かが腰を下ろした。

「あんた、よく来るね」

酒か煙草あるいは両方かでしゃがれた声は二週間前の夜中、病院の廊下で聞いた。

北川雄二。自称フリーライターの強請りや。彼がこの手の店を愛用していることはネットで検索すればすぐにわかった。

本人がツイッターで自慢げに呟いていたからだ。プロフィールの自画自賛ぶりも失笑モノだったが

自分の性癖を自慢げに呟き、たまに寄せられる控えめな批判や指摘を「自分の才能に嫉妬した負け犬の遠吠え」呼ばわりしているのはいつそ憐れみさえ覚えた。

こんな男には本来なら食指は動かない。だが、今回は別だ。

そういえば遊び以外で人を殺すのは随分久しぶりだ、と北山の話しを聞くふりをしながら霧子は思った。

「なあ、あんたもたまってるんだろ。場所、移ろうぜ」

生温かく湿った耳にかかる。ここに来る前に何処かでひっかけてきたのか酒の匂いが鼻をついた。

背筋がぞわぞわとして酷く不快だ。こんな物はさつさと叩き潰してしまおう。

「ねえ」

息を止めて霧子は北山に囁くと、ろうそくの暗い光の中で彼の表情

がだらしなく溶けていくのがぼんやりと見えた。

これほど至近距離にいて二週間前に合った人間の顔を忘れてしまうのか。

まあそのほうが好都合だけれども。

「ここじや狭いわ。外に出ましようよ」

北山がよだれをたらさんばかりに口を笑いの形に歪めて頷くのを、霧子は憐れみすら籠めて見つめた。

「うそだろう……」

霧子が猿若町に降り立ったところ、坪内総合病院の職員用駐輪場で佐々木ががっくりと肩を落としていた。

自転車の後輪がずたずたに切り裂かれている。

時刻はもうすぐ19時を回ろうとしている。自転車やは多分もう閉まっているだろう。

休日までにはまだ四日もある。

その間バス通勤になるならいつもより30分は早起きしなくてはいいけない。

「勘弁してくれよ」

激務続きの今は1分でも遅くまで寝ていたいのに。

「おい、どうした。佐々木」

ふいにかけられた声に慌てて振り向くと、片医師が愛車のパジェロの運転席から身乗り出していた。

「い、いえなんでもないです」

「何言ってんだ泣きそうな顔しやがって。ん……これは酷いな」  
車から下りてきた片はタイヤが切り裂かれた自転車を見て顔をしかめる。

「す、すいません」

「だから何でお前が謝るんだ。乗せるから手伝え」

首をすくめる佐々木の髪をぐしゃぐしゃとかきまわしてから、片はハッチバックをあける。

「え、えっと」

「だから、自転車屋まで乗せてってやるよ。はやくしろ」

「いえ、大丈夫です」

「馬鹿かお前は」

片は大きくため息をついた。

「自転車屋まで何キロあると思ってているんだ。この寒空の下そんな物引きずって歩いた揚句に

風邪ひいたなんてことになったら、皆が迷惑するだろう。ほらはやく」

「は、はい」

指導医の言葉に引きずられるようにやっと佐々木は自転車を引きずりだした。

「行きつけはあるのか？」

「いえ」

「じゃ、俺の知ってる所にいくぞ。あそこなら夜九時までやってるから」

独り言のように呟いて、片は車を発進させた。

平日だというのに道は混んでいた。

「ひどいことじゃがるな」

佐々木ではなく、遙か向こうの信号機まで連なるテールランプに目を向けながら片がまた

ポツリとつぶやいた。

「そ、そうですね」

助手席に座っていた佐々木は居心地悪そうに体をもじもじとさせた。片医師の車は職員用駐車場の中でも特に目立っていたが乗せてもらうのは初めてだ。

外観と同じように内装も佐々木の知っている自動車のそれとランクが違うことが一目でわかる。



坪内総合病院の常勤医の給料がどのくらいかはわからないが、小鉢科長の車が型の古いフィットということから考えると、それほど高いというわけでもなさそうだ。

やっぱり母親が有名な美容クリニックを経営しているせいだろうか。世の中やっぱり少し不公平だ。

「俺たちは別に聖人君主ってわけじゃないから、知らないうちに患者さんを傷つけてしまうことも

あるかもしれない。でも、自転車をずたばろにされても文句を言えないような事をした覚えはないぜ」

「……片先生は、これ、患者さんの仕業だと思っているんですか」  
控えめな問いかけに、片医師は苦く微笑した。

「職員用の駐車場は救急外来専用の入り口のすぐわきだろう。一般用の駐車場は建物を挟んで反対側だし、正面玄関から入ったなら建物をつつきらないとでてこれない。それに昼間は警備員がいるし、何か出来るとすれば朝早くか夜遅くだろ。そんな時間に病院に来るのは救急外来の患者しかいないじゃないか」

佐々木は唇を噛んでうなずいた。12月に入ってから朝七時半出勤が続いている。

そして今日、当直明けの片医師から明け方ずっと払うべき治療費を滞納している厄介な患者がやってきたことを聞いた。

「やる気、削がれますよね」

それまでの病歴もわからずにいきなり飛びこんでくる患者達。

最善を尽くしても感謝されるどころか、罵倒される事の方が多い毎日。

「まあ、世の中ぎすぎすしているからしょうがないか、ほらついたぞ。ここだ」

片の知っている自転車屋というのも、佐々木の知っているものと大分違っていた。

タイヤ交換やパンクの修理も洒落たインテリアショップのような場所で行られると奇妙な感じすら受ける。

やはりタイヤは修理不可能で交換といことになったのだが、その値段を示されたため息が漏れた。

給料日まで吉野家とコンビニ弁当で乗り切るしかないだろう。

「……そんな顔するなよ、厄落としに夕飯奢ってやるから。あれ小出先生じゃないですか」

「あら、片君に佐々木君も。どうしたのお揃いで」

ひょいと棚の間から顔をのぞかせたきついパーマをかけた中年の女性性は二人の顔を見て驚きながらも嬉しそうな顔をした。

続く

## 八話

そう、それは災難だったわね。佐々木君」

おとうしの和え物をつつきながら小出絵里子が慰めるように言った。若槻駅近くのこじんまりとした和食レストラン。

せっかくだから小出先生も一緒にと片医師が連れて来てくれた店だが、

値段の書いていないメニューを見ただけで、佐々木が気軽に暖簾をくぐれる場所ではないことがわかる。

「寒いし、いい魚が入っているというからよせ鍋を頼んだけど他に何か食べたいものはあるか？」

「いえ、これで十分ですよ」

片に尋ねられて佐々木は慌てて首をふった。ファストフードや居酒屋チエーンに慣れきった身には

いくら奢ってもらえるからといって値段のわからない物を頼むなんて恐ろしいことは出来ない。

「佐々木君は奥ゆかしいね。先輩の好意には素直に甘えればいいのに。片君を見習って。ねえ」

意味ありげな視線を小出から向けられて片は気まり悪そうに咳払いをした。

小出医師は小鉢科長の元妻で片がまだ研修医のころは外科医として坪内総合病院に勤めていたらしい。

その後、何があったかはわからないが小鉢医師と小出医師は離婚して彼女は病院を去った。

現在は猿若町で祖父が開いたという診療所を一人で切り盛りしている。

佐々木は何度か小鉢に頼まれて慰謝料の現物支給だという医薬品を届にいった。

運ばれてきた料理は美味しかった。

「これで日本酒が飲めれば最高なんだけどな」

しゃぶしゃぶの要領でさつとだし汁にくぐらせたぶりを食べ、片が言う。

「だったら医者なんかやめて板前になりなよ。喜んでうちで雇わせてもらうから。」

はいこれ、ぶりのカマ焼き。サービスね」

先ほどまでカウンターの途中で包丁を握っていた年配の男性が芳ばしい匂いを漂わせる皿を

テーブルの上に置いてくれた。

「え、片先生つて料理をされるんですか」

「片君の料理はプロ並みよ。むかーしお正月の当直の時に作ってくれたお節はすごかったわね。」

この店で学生時代バイトしていたんだっけ」

小出の言葉に佐々木は取り皿とはしを持ったままへえとため息をついた。

この口の悪い指導医がキッチンに包丁を持ってたっている姿など想像ができない。

「馬鹿野郎、何て顔してるんだ。俺が料理するのがそんなにおかしいか」

片にじろりと睨まれて佐々木はすいませんと小さくなった。

「父親が亡くなって以来母が働いて俺が料理をするつてのが自然になつていたからな。」

姉がいるんだが地方の医大に進学して家にいなかったし。いい気分転換なんだ」

「晶子ちゃんは砂糖と塩をしょっちゅう間違えるくらい料理が苦手なのに面白いねえ」

くすくすと小出が笑う。どうやら晶子ちゃんというのが片の姉らしい。

そういえば小出と小鉢、さらに片医師の姉は同じ大学だと佐々木は小耳に挟んだことがあった。

ちなみに自分は片医師の後輩になる。医師の世界は広いようで案外狭い。

「そついえば、救急科に当直のバイトの先生が入ったんだって。少しは当直回数が減ったんじゃないの？片君」

小出の質問に片は僅かに眉を寄せた。

「そうなければいいんですけどねえ。ほら、今月に入ってから猿若町でやたらと火事が多いじゃないですか。俺も佐々木もしょっちゅうオンコールで呼び出されるから落ち着いてられないんですよ、なあ」

「は、はい」

佐々木も大きくうなずいた。

ICUで鈴木明子が「事故死」以降も救急科には頻繁に熱傷患者が運ばれてきた。

手が足りないと寝入りばなに呼びつけられる事もしばしばで、今では鈴木患部を見て吐きそうになったことなど嘘のように淡々と処置ができるようになった。

冬は空気も乾燥するし、暖房も使うので火事が増えるのは毎年のことだが今年は特別らしい。

「ああなるほど、確かに今月に入って7件は多すぎるわよねえ」

小出も宙をにらん顔をしかめた。

「あの街は消防法なんて関係ないからなあ。建物も古いものが多いしガタが来ているのかもしれないな。街全体が」

「それがそうともいえないのよねえ」

「どういことですか、小出先生」

佐々木の問いに小出はさらにきゅつと眉を寄せて声をひそめた。

「ここ一ヶ月の火事は放火、らしいの」

「放火ですか」

「ホステスにこっぴどくふられたおっさんが火でもつけてる………すいません」

と片が意地悪く笑いながら言いかけたが、小出から厳しい眼差しを向けられてたちまちしゅんとなった。

こんな彼を見るのは初めてで、佐々木は場違いだと思いながらもおかしくなった。

「あの街はそういうトラブルは雨が降るより頻繁に起こるから対処は万全よ。それに案外自分の所で料理をするお店は少ないのよ。厨房がそれなりに整っている店はさすがに防火には注意を払っているわ。それにね」

小出はさらに声をひそめた。三人の顔が自然と近くなる。

「放火は大概朝の9時〜11時くらいなの。まあ、あの町では深夜になるわね。そしてこっちの方が重要なんだけど度々放火現場の近くで白衣を着た人物を見たっていう人がいるのよ」

「白衣を着た、人ですか」

佐々木は首を傾げた。白衣だなんてあの町に最も似つかわしくない服のような気がする。もし白衣の人物が放火犯だったとしてなんでそんなに目立つ格好をしているのだろうか。

「あの町で白衣なんてそう珍しくはないわよ、佐々木君」

表情から自分の考えていることを察したのか、小出が説明してくれた。

あの町には、その日暮らしに近いような水商売をしながら年を重ね働けなくなつた高齢者も結構住んでいるらしい。

「もちろん年金や保険なんか払っているわけがないから、病気になるたらそのまんま孤独死してしまうケースが多いのよ。

それを防ぐためにボランティアで様子を見て周っているお医者さんや看護師さんもいるのよね」

だから、真昼間に白衣姿の人間がうろろしていても誰も気にも留めないらしい。

「なるほど、犯人だとしたらうまく考えたもんだなあ」

感心したように片が呟く。

「そうね、しばらく往診がしにくかったわ。私も」

相変わらず苦い顔で小出は答えた。多分彼女にも疑いの眼差しが向けられたのだろう。

「でも、何のために放火をしたんだろう。男か女かもわからないのですか」

「それがわかったら苦労したいわよ。そうね、白衣ばかりに目がいっちゃっているらしくてあんまり性別や年かっこの情報は無いけれど長い黒髪だったかもしれない。という話は聞いたわ」

長い黒髪と聞いて佐々木の脳裏に前田医師の顔が浮かんだ。何て想像力が貧困なんだ。俺は。

長い黒髪と白衣と聞いていちばん身近な医師を思い浮かべるなんて佐々木はそつと頭をふって脳裏にうかんだそれを打ち消した。

……予想外、だったわ……

あの店からいくらかも離れていないさらに細い路地裏で霧子は舌打ちをした。

そのすぐわきにはとろんとして半分眠ったような眼をした北山がだらしなく地面に崩れ落ちている。

店をでるとき北山はケチくさく自分が頼んだ水割りを飲みほしたが、その中には暗闇にまぎれて霧子が睡眠薬を入れていた。

これは、昼間この街の隅でたむろしている生活保護の老人からビール6本と引き換えに手に入れたものだ。

いくら医師とはいえ自分の診療科では使わない薬の処方箋を書けば疑われてしまう。

生活保護者に命じて処方箋が必要な睡眠薬や向精神薬を手に入れ、それを転売することは今では珍しくもないしそれなりに需要もあるホテルで動けなくなればいいと少なめに入れたのだが、どうやら長年の不摂生で体が弱っているらしく

大層なききつぷりだ。これではもう歩くことは難しいだろう。かといってホテルまで担いで行けばさすがに目立つ。

このままうつちゃっておけば身ぐるみははがされそうだけど、それ

では面白くない。

いらいらと爪を噛みながら霧子が考えこんでいると視界の端を見知った人影がよぎった。

……いまのはまさか……

慌ててビルの壁に張り付くようにして、今日の前を横切った人影をもう一度よく見る。

貧相で小柄な体格。半ばはげ上がった頭頂部。数回しか会ったことないが強く印象に残っている。

坪内総合病院 毛利事務長。

どうもかなり酔っているらしく、右に左に大きく揺れながら路地の奥に進んでいく。

霧子は躊躇せずに後をつけた。しばらく歩くと路地はコインパーキングで行き止まりになったいた。

毛利事務長はふらふらしながら止めてあった一台の車に乗り込む。完全な飲酒運転だが、まったく躊躇しないところをみると何度もやっているのだろう。

これは、チャンスかもしれない。

霧子は急いで路地を惹き返した。道は一本。毛利の運転する車はここを通るしかない。

だらしなく道ばたに座りこんでいる北山をずりりとひきずって道路をふさぐような形でよこたえた。

周りは薄暗いネオンサインがまたたくのみ。

酔って判断力が低下した頭では、北山に気づくこともなかるう。

背後から眩しい明かりが迫る。

素早く近くのビルにとびこむと、結構なスピードを出してベンツがすぐわきを通り過ぎていった。

ぐしゃりと何か湿った重いものが潰れる音がする。

すかさず道路に飛び出すと、頭を踏みつぶされた北山の手足がびくびくと痙攣していた。

何を踏んだかも気付かないのかそのまま走り去っていく自動車。



霧子は素早く死体と車の後部に向かって携帯電話のカメラのシャッターを切った。

続く

## 九話

「前田先生、これを小鉢科長に渡していただけますか」

病院の女子更衣室から出てきた霧子にまるで待ち伏せていたかのよう  
にタイミング良くこそそこそと近づいてきた毛利が素早く茶封筒を  
手渡す。

「あら、なんでしょう毛利事務長」

小首を傾げわざとらしく尋ねると、毛利はい、いえ大したものじゃ  
ないんです。

必ず本人に手渡ししてください。

と暑くもないのに汗の滲んだ広い額を拭きながら素早く周りを見回  
して、そそくさと去っていった。

その後ろ姿を見て霧子は嗤う。

偶然とはいえずに理想の下僕が手に入った。

薬を飲ませ、朦朧としていた北山を毛利の運転するベンツに曳き殺  
させてから五日が経過していた。

十二月も半ばを過ぎ、世の中が少しづつ慌ただしくなっていく。

最近の携帯電話のカメラは本当に大したものだ。光源はちらつくネ  
オンサイン。しかも

かなり乱暴な動作でシャッターを切ったのに車のナンバーと地面に  
横たわる北山の姿が

鮮明に移っていた。

ひき逃げの決定的な証拠。これが警察の手に渡れば毛利は今まで築  
き上げてきた社会的地位を一瞬で失ってしまうだろう。

霧子は周りに人気がないことを確かめると北山にゆっくりと近寄っ  
た。後頭部をもろに曳かれたらしくタイヤの幅に頭蓋骨が陥没し、  
かつて顔だったところは単なる血肉の塊になっている。

これは車の方にもかなりの衝撃があったはずだが、酔っていたので  
気がつかなかったのだろうか。

まあ、その時はそんな悠長なことを考えている暇はなかった。

北山の死体を何とかしなければ、警察が来る。

いくらこの街が警察より暴力団の方が幅を利かせている歓楽街だとしても、ひき逃げ死体をそのままにしておくわけがない。

警察に毛利がつかまってしまつては困る。

そこで霧子は、北山のまだ生温かい腕を自分の首に回した。暗がりなら酔い潰れたツレを引きずって歩いているように見えるだろう。誰かにすれ違わないように願いながら少し先の古ぼけたビルまで歩く。

窓が少なく、入口には幾つにも区切られた大きな看板がある。この街にはよくあるタイプだが、その看板には店の名前が一枚もかけられておらず狭い入口も闇に沈んでいる。何度か放火目的で街をうろついている時に見つけたもので、利権問題か老朽化かどちらかで無人となったものだつた。

二週間の間それなりに観察していたが、誰かが出入りしている様子はなかった。

霧子はそのまま北山の死がいを二階まで担ぎあげる。北山も決して大柄というわけではないが死体になれば女性が運ぶのはなかなか辛い。

吐く息が白くなるほどの寒さだというのに、目的の場所まで北山を引きずっていった時には汗だくになっていた。

廊下の一番奥まった場所にある共同トイレ。店舗スペースにはがっちり鍵がかけられていたがここは自由に出入りできるようになっている。

霧子は女子トイレの一番奥の個室に北山を無造作に突っ込むと、中から鍵をかけ自分は便器の上によじ登って隣の個室へと移る。

こうしておけばしばらく発見される事はないだろう。別に永久に発見されない必要はないのだ。腐敗が進み、死因の特定が難しくなるまでの

時間が稼げればそれでいいのだ。

一瞬で北山を殺してしまったのは後悔が残るが、その分役に立つてもらおう。

明け方、家に戻った霧子は携帯の写真をパソコンに転送し何枚も印刷した。

引き延ばしてみれば毛利の車のタイヤには白い骨片らしきものも認められる。

これを見せられたらいい訳はできまい。

霧子はそれをありふれたB5サイズの茶封筒にいれど、少し早めに出勤した際に毛利事務長のメールボックスに放り込んでおいた。坪内総合病院規模の事務長だと個人あての郵便物もそれなりの量になる。ここに入れておけば明日の朝には事務員が本人に手渡してくれるだろう。

さらに、その夜一人になった医局で霧子はパソコンに向かった。

この病院では職員同士がメールでやり取りできるように一人一人にイントラネット用のメールアドレスが支給されている。

と言っても、バイトの霧子は対象外だ。

「だったら拝借すればいいわ」

呟きながら、霧子は8ケタの数字を打ちこむ。と、現れたのは小鉢科長のメールボックスだ。

パソコンにそれ程興味のない人間は、恐ろしいほどセキュリティには無頓着だ。

そして小鉢は自分のパスワードをポストイットに書きこんで、無造作にモニターの脇に貼っておくタイプだった。

メールボックスの中には無論毛利事務長のアドレスもある。

「メールボックスに入れておいた写真は見ていただけましたか？私は明後日の朝あれを警察に提出する予定です。それが嫌だというのでしたら、前田医師から渡された封筒の中身の指示に従って下さい」書き手の特徴がでないように要点のみを書いた文章を小鉢の名前で毛利に送る。

翌日の夕方毛利事務長が真っ青な顔で救急科の入り口のあたりをう

ろろろしているのを見つけて、霧子はにんまりとした。

ハンドバックから封筒を取り出し、何も知らないふうにも利に手渡す。

その返事が今返ってきた。

彼はきつと自分がしでかした事の重大さに怯え、それをもみ消すことに全精力を注いでいるのだろう。

だから、なぜ小鉢があの写真をとれたのか。イントラネットやメールボックスなど他の職員の目につきやすい手段で接触してきたのか。さらに、どうして自分を通して必要な物のやり取りをするのかなどの疑問は思い浮かばないに違いない。

はやる心を抑えて、霧子は医局にひとりきりになった時を見計らってそつと茶封筒を開けた。

そこにはここ一ヶ月に救急科を受診した人間の住所氏名と電話番号が記載されている。

事務方が管理する患者の個人情報。小鉢の名前で要求した、もの。

「これで、遊びがやりやすくなったわ」

A4用紙に印刷されたそれを何度も読み返しながら、霧子はうつとりと呟いた。

続く。

## 第十話

「あれ、小鉢先生は」

「なんかまた院長に呼び出されているぜ。困るよな。よし、ちょっといてくれ。処置を変わる」

処置台に横たわっているのは、三十分ほど前に救急車で運ばれてきた交通事故に遭ったという患者。

痛みに呻く患者を小鉢は一通り診察し、佐々木に手早く処置を指示すると慌ただしく処置室を出ていった。

最近頻繁にこんなことが起こる。一昨日など手術中で手が離せないと何度も伝えたにも関わらず執拗に呼び出しがありついに小鉢ではなく片が癩癧をおこして「用があるならそっちからこい」と怒鳴り散らした。

クリスマスまであと数日というこの時期は皆いつもと同じようでも何処か浮足立っているのか

交通事故も普段より多くなっている。多い時は一日に3件も4件も運ばれてくる患者を処置するだけでも大変なのに、最もベテランの小鉢がちよくちよくいなくなつてはたまらない。

小鉢が戻ってきたのは結局処置が終わって一時間後だった。

「いつたいなんなんですか、ここ数日の頻繁な呼び出しは。上の皆さんはよっぽど救急科がお嫌いなんですかね」

腕を組んで片が惘然とした顔で吐き出すように言つと、小鉢は珍しく途方に暮れた顔で天井を仰いだ。

「なあ、片君に佐々木君」

「はい」

「どうしたんですか、科長」

その様子に佐々木はもちろん片さえも心配そうに眉をひそめる。

十年近く救急科の中心になってきた小鉢は、めったなことではその柔らかな物腰を崩すことはない。

「ここ半月ほどは前田先生が加わったとはいえ、普通よりもかなり忙しかった。まあ、これは毎年のことだから慣れているといってしまえば慣れているんだが……」

「科長、だから何なんですか」

「ここ数日のことでもかなり沸点が低くなっているらしい片がたまりかねたように口を挟んだ。

「あ、ああ。すまない。その、僕は患者さんに対して不快な態度を取ったりしていなかっただろうか」

「……」

佐々木は思わず片と顔を見合わせた。

「どう、思います。片先生」

「どうって、俺よりはお前の方が研修で科長と一緒にいるだろう」  
問いつ返されて、佐々木は考えた。

だが、いくら記憶を引っ掻きまわしても思いだされるのは、どんなに態度の酷い患者にも丁寧に接していた小鉢の姿だ。

「俺は小鉢先生が患者さんが不快に思うような態度をとったとは思いません」

「同感です。というかどうしてそんなことを思っただんですか」

佐々木と片が口々に尋ねると、小鉢は一瞬ためらった後に白衣のポケットから数枚のメモ用紙のような物を取り出した。

「先ほど院長から渡された」

「あのけなしが作った御意見用紙じゃないですか」

片が首を傾げながらそれをつまみ上げる。

「病院もサービス業の一環なのだから、患者様の声にも耳を傾けなければならぬ」と毛利事務長の肝いりで受付に設置されたそれは今のところ、待ち時間が長いから甲斐性しろとか、診療費をもう少し安くしろなどどうにもできない意見ばかりが投下されている。

「……なんだ、これは」

「どうしたんですか」

尋ねた佐々木の目の前に片が用紙をつきだす。そこには別の紙に印

刷された文章がべつたりと張り付けられていた。

『救急科の小鉢医師は患者の心を踏みにじる極悪人だ』

『早急に小鉢医師の解雇を』

「ど、どういふことですか、これは」

「僕にもさっぱりわからない。自分で思い返しても心当たりがないんだ。ただ、最近似たような投書が毎日投げ込まれているらしい。

加えて、同じような内容の電話もかかってくるそうさ。だから君達に思い当たることがないか聞いたんだが……」

「ふざけるな」

片が両手を勢いよくスチール製の机に叩きつけた。

鈍い音と共に用紙がひらひらと宙を舞う。

「どうせこんな物、鎮痛剤目当てで仮病でやってきた奴らの嫌がらせにきまつてる。あいつらは性根が腐ってやがるんだ。まさか院長はこんなものを鵜呑みにしたんじゃないんでしょうね」

「そうじゃない。だから落ち着きなさい。片君」

小鉢が優しく激高のあまり震える片の背中を叩いた。

「院長先生は僕を心配して下さっているんだ。最近は考えられないような行動をとる輩も多いから、年内いっぱい夜間の間も警備員を救急車出入り口においてもらうことになったよ。ついでにこれも持たされた」

と苦笑しながらもう片方の白衣のポケットから取り出したのは、色鮮やかな防犯ブザーだ。

「GPSつき防犯ブザーだそうさ。ひもを引っ張れば警備会社に繋がるらしい」

「っは。こうなる前にもっと有効な対策を取るべきだったんですよ。いくら防犯ブザーを持っていたって夜道でいきなりぶすりと差されたんじゃ終わりじゃないですか」

まだ怒りが収まらないらしく、吐き捨てるように言った片に小鉢はもう一度苦笑った。

「しばらくは寄り道をせずにまっすぐ帰るよ、車でね。君達も一応



気をつけてくれたまえ。救急科全体が恨まれている可能性もあるんだからね。じゃ、僕はちよつと昼ご飯を食べてくる。申し訳ないんだけど空腹でね」

そう言い残して小鉢が医局を出ていくと、片も

「悪い、ちよつと頭を冷やしてくるわ。五分程でもどる」

と後に続いた。

ひとり医局に残された佐々木は急に肩のあたりから重苦しいもののけられたような気持になって、大きくため息をついた。いつのまにか時計が午後の四時を回っている。ブラインドの隙間から漏れる落日が部屋を不吉な紅色に染め上げていた。

「やりきれないよなあ」

自然とぼやきが口から零れおちる。

肩の言っていた鎮痛剤目当ての偽患者は、救急科の大きな悩みの種だ。

医師の処方薬が必要なその手の薬の中には使い方を間違えればドラッグの代わりになってしまう物もあるし、インターネットで一錠単位の高値で取引されるものがある。

薬目当ての患者は診察室にはいるやいなや薬の名前を告げて、それを処方してくれさえばよくなるとまくしたてる。

とにかく薬が手に入りさえすればよいのだから、暴言は当たり前暴力沙汰も珍しいことではない。

しかし、どんなに患者が暴れても医師が同じような態度をとれば問題にされてしまう。ということ

小鉢も片も時に笑顔をこわばらせながら、患者を必死に説得し続けた。

その結果が、これだとしたら自分達がしていることはざるに水を注ぎ続けているようなものではないかと空しくなってくる。

佐々木はもう一度ため息をついて、机の上に散らばった御意見用紙をノロノロと拾い集めた。

見たくもないものだが、散らかしておくわけにもいかない。

それにしても、手が込んでいるな。

別の紙に印刷した文章を張り付けるなんて、病院でやれば目だっただろうに。

それとも用紙を家に持ち帰って、わざわざ投函しにやってきたのだろうか。

その労力をもう少し違った方に生かせばいいのに。

そう思いながら、もう一度文章を読み返した時佐々木は奇妙なことに気がついた。

霧子が力を籠めて重い土蔵の扉を開けると、冷氣と一緒にアンモニア臭が体に巻きついてきた。

「気分はいかが、立花さん」

診察室で患者に尋ねるように優しく問いかけると、微かなうめき声が返ってくる。

「あら、まだ元気そうね」

霧子は笑いながら懐中電灯のスイッチを入れる。暗い光の輪の中に浮かび上がったのは、奇妙な格好で縛りあげられた若い男性だ。

梁からたらされた太いロープが輪になって首と胸、さらに右足首を通されて両腕を背中でくくりつけられる形で止められている。

複雑そうに見える縛りだが、手首の部分で蝶結びにしてあるはしっこを引っ張ればするりととける。しかし、片足を下におろそうとすれば

胸と首にかけられた輪が一気にしまるので、ちょうどバレエのアラベスクの型のような格好を保ち続けなければならない。

まだ幼さの残る顔は土気色に変色し、コートを着なければ寒くていられないような場所なのに汗で前髪がべったりと額に張り付いている。

立花は勢い良く首をふりながら、固くかまされたさるぐつわの奥でうめき声をあげ続けた。

「なあに、何が言いたいの」

霧子が小首を傾げてさるぐつわをほどいてやると、立花はげほげほとせき込みながら掠れた声をあげた。

「たのむよ、もうゆるしてくれよ。二度としないから。限界なんだよ、死んじまう」

哀願している間にも、持ちあげられている右足はぶるぶると震えな下がっていく。だが、足が地面にふれるほどまでさがると首にかけられたロープの輪が皮膚に食い込むほどしまり、立花は苦悶に顔をゆがませながらまたふらふらと足をあげるのだ。

「まだ二日しか経ってませんよ、立花さん。あなたは診察室でもう四日眠っていない。あの薬を飲まない限り眠れないって散々ごねたじゃないですか」

「だから、頼まれたんですよ、大学のダチに。一錠2500円で売れるからって。十日分も処方されればいい小遣い稼ぎになるって。それだけなんだよう。信じてくれよう」

首を絞められた苦しさで破けたのだろう、白目が真っ赤に染まった目を限界まで見開いて立花は必死に助けを請う。

全開にされたジーンズのジッパーからだらりと垂れ下がったペニスのさきから湯気の立つ液体が迸り出た。

「まだ尿がでるなら問題ないわね。本当に危なくなったら腎機能が低下して体中がむくんで尿がでなくなるから。じゃああと二日頑張ってね。そうしたらこれ、あげるわ」

霧子が立花の目の前でひらひらとふってみせたのは、彼が処方しろと喚いた睡眠導入剤だ。

小鉢には具体的に薬の名前をあげて処方を求めてくる人ができるだけ断って、と指示されていたし実際にとても

睡眠障害には見えなかったので、断ったら横暴だ、訴えてやると掴みかかれた。

男性の看護師につまみだされる寸前まで、喚き散らしていたのだが翌日毛利から渡された住所をたよりに尋ねた家の前で

あっけなく後頭部に鉄板入りポシェットの一撃を受けて昏倒してくれた。

大型のトランクをもってタクシーを捕まえても、真昼間に若い女性なら海外旅行帰りだと誰もが思ってくれる。

「たのむよう、反省しているからっんぐぐ」

懇願し続ける立花の口に再びさるぐつわをかませると、霧子は土蔵を出た。

人は条件次第では1週間ほど眠らずにいられるらしいが、あの状態であと二日はとても持たないだろう。

絶命する瞬間を見たいが、タイミング良く死んでくれるといいんだけど。

そんなことを考えながら、家に戻って夕食の準備をする。まだ午後の四時半だがこの時間に食べてしまわないとバスに間に合わわない。

玉ねぎを刻み、小さなフライパンにめんつゆ張っためんつゆでひと煮立ちさせ、スーパーで買ったカツを入れて卵でとじる。

井によそったご飯にそれに乗つけてインスタントの味噌汁と漬物を添えた。

最近には本当に食欲が旺盛で困る。

「しばらく遊びを控えた方がダイエットになるかしら」

10分足らずで全てをいらいげ、空っぽの食器を見回しながら霧子は呟いた。

続く。



## 十一話

「こんばんは佐々木先生。どうしたんですか？ 難しい顔をして」

後ろから突然声をかけられ、佐々木は飛びあがらんばかりに驚いた。

「あ、前田先生。ず、随分と早いですね」

「もう19時近くですよ。ずいぶん熱心に考えこまれていましたね。私が入ってきたことも

気付かなかったでしょう」

「え、ええ。す、すいません」

片手で口を押さえて控えめに笑い声を洩らす前田女医に、佐々木は恥ずかしさで全身から汗が噴き出すような心地がした。

「あら、謝る必要はないわよ。片先生や小鉢先生は？」

尋ねながら、小首を傾げる様子がとても愛らしい。

三十代半ばの成熟した女性なのに、まるで十代の少女のように見える。

前田の肩口をさらさらと流れる黒髪を見て、佐々木は7年前にたった一週間だけ妻だった人のことを思い出した。

彼女が元気だったら、前田のようにいつまでも少女のような可愛らしさを失わない女性になっていただろうか。

「どうしたんですか、佐々木先生。ぼんやりして」

再度尋ねられて佐々木はまた体中からどっと汗が噴き出す心地がした。

「すいません。片先生は救急医の勉強会で白鳳大学病院へ行っています。小鉢先生は、その、会議に出席しています」

本当は万が一に備えて他の科の科長や院長さらに警備会社もまじえた対策会議なのだが、前田女医に全てを話していいかどうか判断がつかなかった。

「そう、じゃあ佐々木先生は私が出勤する前のお留守番だったのね」「え、ええ」

”お留守番”といわれてしまえばまるで子供のようだが、実際佐々木は医師としてはまだ卵からかえった雛も同然で文句は言えない。

「じゃ、お留守番御苦労さま。後はまかせてね。注意が必要な患者さんはいないかしら。あら、これは？」

スチールの机と机の間に挟まった御意見用紙をつまみ上げた前田に、佐々木はしまったと首をすくめた。

いつのまにか一枚そんな所に挟まっていたなんて。

「な、なんでもありませんよ」

慌てて用紙を引きちぎる勢いで前田の手からそれをひったくると、

彼女は一瞬驚いた顔をしたがすぐにちいさくごめんなさいと謝った。

「部外者が首を突っ込む所ではなかったわね」

その姿に佐々木は胸がずきりと痛んだ。

部外者というなら自分も同じだ。ここにいるのは研修医のカリキュラムに従っているからだけで、やりがいを感じているがそれでも救急医を一生の仕事と定めているような小鉢科長や片医師とは全く違う。

「い、いえ違うんです。その、前田先生を無闇に怖がらせてはいけないと思って」

「怖がるってどういう事？」

訊ね返してきた彼女に、佐々木は出来る限り詳しく昼間小鉢から聞かされたことを説明した。

「そう、大変なのね。救急病院はどこも」

と前田はため息をつく。

「どこも、っていうと」

「私はいろいろな病院でアルバイトをしたんだけど、どこも迷惑な患者には悩まされたわ。」

多分モンスターペイシエントなんて言葉ができるずっと以前からね」

「そうなんですか」

まるで少女のように華奢で可憐な前田女医が淡々と語る様が、かえって佐々木にうそ寒い思いを抱かせた。

医者に難癖をつけ、暴れる患者はもはや日常風景の一部なのか。

「前田先生は……」

「何？」

どうして、アルバイトを続けているんですか。という問いを佐々木は慌てて飲みこんだ。

こんな所で聞いてよい話題ではないだろう。

「常勤医にならないか不思議？」

だが、前田はその質問を見透かしたかのように逆に尋ねてきた。

「え。ええ、あ、あの気に障ったらすみません」

耳まで赤黒くなってうつむく佐々木に、前田は淡い微笑を向ける。

「いいえ、よく聞かれるから慣れているの。そうね、私はいろいろな経験をしたいから。かしら」

「いろいろな経験ですか？」

ええ、と前田は深くうなずいた。

「まだまだ外科医の世界は男社会だから、女医は碌な症例を任せてもらえないのよ。最初に入った医局で先輩の女医が十年たつてもヘルニアと盲腸の手術しかやらせてもらえないのを見て、なんだかがっかりしてね。ある程度は我慢したけれど、ついに医局を飛び出しちゃったのよ」

「そ、そうなんですか」

「救急医は大変だけれども、その分たくさんの症例に触れることはできるのよ。」

アルバイトは身分は不安定だけれどその分病院が肌に合わなかったらやめれる気楽さがあるわ」

笑顔で喋り続ける前田に、佐々木は感嘆の小さなため息を漏らした。自分は多分与えられた環境に満足できなくても、そこから飛び出して新天地を求めるより妥協点と憂さ晴らしを探し出して落ち着いてしまうだろう。

「すごいですね、前田先生」

「そう、わがままってみんなはいうけれど。でもこんな脅迫状だが



いのものを送りつけてくる患者がいるとなると  
ちよつとやつかいね。何にもないといいんだけど」

そういつて眉をひそめた前田に佐々木も頷く。

「そうですね。でもこの脅迫状ちよつとおかしいんです」

「おかしい、なにが？」

「なんで小鉢医師ばかり名指しなんでしょう。救急科はほとんど  
が飛びこみの患者さんですし、

俺達は一応名札はつけていますが、いちいち名乗らないですから気  
づかない人がほとんどだと思っんです」

「そうねえ」

前田はもう一度ご意見容姿をつまみあげてうーんと唸った。

「でもクレームをつける人は妙に細かい所に気がつくから、名札を  
見ていたかもしれないわね。」

わざわざパソコンで打った文章を張りつけることといい、執念深そ  
う。何もないといいわ」

「……そうですね」

佐々木が頷く。その時。

「先生がた、すみません。受け入れをお願いしますか」

市川が顔を青ざめさせて医局に飛び込んできた。

「なんで小鉢医師ばかり名指しなんでしょう。救急科はほとんど  
が飛びこみの患者さんですし、

俺達は一応名札はつけていますが、いちいち名乗らないですから気  
づかない人がほとんどだと思っんです」

「そうねえ」

頷きながら、霧子はそうきたか。と心の中で舌打ちをした。  
これをやったのは見当がついている。多分事務長の毛利だ。

わざわざ印字した別の紙を張り付けるということは、筆跡を知られ

たくないという事。

つまり、字を見ればどのだれか気づかれるおそれがあるのだろう。ふつつのモンスターペイションとはそんなことはしない。

頭に血がのぼるままに、直接抗議に来るか電話口でまくしたてることがほとんどだ。

馬鹿な奴だ、もう少し頭がいいと思っていたのだが。

こんなことをすればいたずらに騒ぎが大きくなるばかり。遊びがやりにくくなるじゃないか。

もう少し、脅した方がいいだろうか。小鉢の名前で。

しかしこの研修医結構鋭いところがある。いつも伏し目がちでおどおどしているから

最近よくあるタイプの指示がないと動けない人間だと思っていたのに。

……もう少し、手名付けた方がいいかしら。

佐々木とたわいのない会話を交わしながら、霧子は頭をフル回転させていた。その時。

「先生がた、すいません受け入れをお願いしますか」

と看護師の市川が医局に飛び込んできた。

「救急車？いつ受け入れ要請が来たの？」

「いいえ、駐車場に倒れていたんです。ひどい腹痛を訴えていて。

見てもらえますか」

「わかったわ。連れてきて」

「小鉢先生を……」

「まだいいわ、佐々木先生。もし手が空いていたら手伝って」

「はい……」

看護師達の手によって処置室への受け入れ準備が瞬く間に整えられる。

ほどなくしてストレッチャーに乗せられてやってきたのは、高校の制服らしい紺のブレザーを着た少女だった。

体を海老のように曲げて、額には脂汗が滲んでいる。

よほどの痛みに耐えているようだ。

「大丈夫、名前はいえるかしら」

霧子の問いかけにも食いしばった口からはうめき声が漏れるばかりだ。

「盲腸ですかね」

「かもしれないわ」

少女の太ももと鮮血が伝わったのはその時だ。

「え、あ」

「佐々木先生、どいて」

戸惑う佐々木を押しつけるように、霧子はストレッチャーに近付くと勢いよくスカートをまくりあげた。

陰部を覆っている下着も真っ赤に染まっている。

「ハサミをかせて」

躊躇なく手渡されたそれで下着を切りさくと、柔らく薄い陰毛におわれた秘部の奥を指で確かめた。

「……出産、だわ」

「え!!」

佐々木はもちろんその場にいる看護師全員が固まる。

「もう、頭が触れる」

「ど、どうしましょう」

おろおろと佐々木が尋ねた。

ここは総合病院だが、小児科と産婦人科はない。

「今から、救急車で別の病院を」

「まって、それじゃ間に合わないわ」

慌てて出ていこうとした看護師を霧子は押しとどめた。

「受け入れ先も決まっていけないし、このままだと救急車の中で生み落としてしまうわ」

「じゃ、どうすれば」

「佐々木先生、取りあげましょう」

「え？」

驚く佐々木の手を霧子はぐいと引つ張った。

「今診察したところ、赤ちゃんは正常に参道を下っています。取りあげている間に受け入れ病院を」

探して、分娩直後に搬送した方がリスクが少なくて済みます」

「で、でもおれ。出産は初めてで」

「そのうち立ち会います。腹をくくりなさい!!」

まだおろおろしている佐々木を一括して、霧子はぐいと女子高生を仰向けに寝かせた。

続く

## 十二話

処置室の空気は叩けば固い音がしそうなほど張り詰めていた。

一步処置を間違えれば命が危ない患者ばかりが運ばれてくる救急科では、すでになれっこになっているはずなのに

佐々木は立っているだけで痛いほどの喉の渴きを感じる。

処置台の上では女子高生が蒼白な顔色で、うめき声をあげ続けている。

下腹部はよくみれば不自然なふくらみがあるが、それでも一般的な臨月の妊婦よりはかなり小さい。

「佐々木先生！！」

出産の進み具合を観察していた前田女医の鋭い呼び声に、佐々木は弾かれたようにはいとこたえる。

「いきみが上手くできなくて出産が進まないわ。後ろから彼女を支えてあげて」

「え、ど、どうすれば」

「背後にまわって背中を胸で支えるようにしてあげて。手も握ってあげてね」

いつの間に側にいたのか、救急科の最年長の看護師である小山が耳元で小声で補足説明をしてくれた。

「は、はい」

「大丈夫、立ちあい出産で旦那さんが奥さんを支えることもよくあるの。途中で力を抜かないで、全力で支え上げて」

励ますようにポンと背中を叩かれて、ようやく佐々木の固まっていた体が動く。

ふと辺りを見回せば自分以外は皆普段のスピーディーさはないものの、的確に前田女医をサポートしている。

「産婦人科に勤務経験のある看護師もいますから、今市川さんが受け入れ先を探してくれています。」

とりあえず今は無事に赤ちゃんをとりあげること集中しましょう」

「判りました」

佐々木は頷くと処置台の少女に声をかける。

「今から君の体を後ろから支えるからね。いくよ」

処置台の上に乗る少女の体を椅子の背もたれのようにささえると、汗ばんだ手がすさまじい力で腕を掴んだ。

骨が軋む音すら聞こえてきそうなのその力に、佐々木は思わず叫び声をあげそうになる。

「いいよ、赤ちゃんが下りてきた」

前田女医の言葉がなかったら、腕を握り締める手を振り払っていたかもしれない。

「痛みが来たら思いっきり下腹に力を入れなさい。息をとめちゃ駄目。短く吐き続けて」

前田の指示に少女の絶叫が重なる。

佐々木の胸にその頭がぐいと押し付けられた。

「前田先生K病院が母親、白鳳大学病院が赤ちゃんを受け入れてくれるそうだ。経過はどう？」

マスクをかけた小鉢が処置室にやってきたのはその時だ。

「今のところ順調です、もう少しで頭がでます勝手をすいません」

「謝るのは後だ、今は無事に赤ちゃんが生まれるように全力を尽くそう」

「頭がでます」

何か湿ったものが床に滴る音と共に、少女が再び絶叫をあげる。

「もう少しだから、がんばりなさい」

励ます前田女医の顔には点々と赤黒い物が飛び散っていた。

「もうだめ、痛い痛い痛い！！」

汗と涙で顔中を濡らして少女は激しく頭を振る。

「お母さんがそんな弱気でどうするの」

間髪いれずに前田がぴしゃりと叱りつける。

「が、がんばって。もう少しだから、多分」

佐々木がおどおどと励ますと、少女は縋るような眼で見上げてきた。  
「終わるの、もうちょっとで終わるの。痛い、痛い痛い」

「うん、終わる。だから、だから頑張って」

「痛いよね、じゃあおもいきりいきみなさい!!」

前田女医の叱咤と少女の悲鳴が処置室を揺らしたその直後。  
元氣な鳴き声が、響き渡った。

「お疲れ様、佐々木君」

目の前にひんやりと冷たい汗をかいている冷たい缶コーヒーを差し出され

ようやく佐々木は我にかえった。

「寒いけど、今の君はこっちの方がいいんじゃないかと思ってね。  
汗かいてるし」

「すいません、小鉢先生」

佐々木はやや長めの癖のある髪をかきまわしながら、苦笑する小鉢から缶をうけとった。

時刻は午後9時を回っている。無事出産が済んだ後の搬送の手續きとそして診療科のない患者を

成り行きとはいえ受け入れてしまった後始末に追われ、三人の医師がようやく医局に戻ってきたのはつい一五分程前だった。

喉を流れていく冷えた苦い液体が酷く心地よい。

「こんなことが再び起こって欲しくないんだが、佐々木君にはいい経験だったんじゃないかな」

「……はい」

缶を両手の中できると回しながら、佐々木は答えた。

白衣の両そでには少女の指の後がくつきりと残り、命を生む苦しみ

と痛みを無言で伝えている。

「俺、座学で勉強しただけで、実際の出産は初めてで……」

「ああ、そうだろうね。でもよくあの患者さんを支え続けてくれたね。僕も分娩台以外の場所で出産をさせるのは

実は初めてだったんだ。正直生まれるまで手も足も出なかったよ。

前田先生がいて助かった」

「本当ですね」

佐々木が頷いた時、噂をすればなんとやらで前田が医局に戻ってきた。どうやら買い物だったらしい。

その手には佐々木と同じ缶コーヒーがあった。

「先生、本当にお疲れ様」

「いえ、勝手なことをして申し訳ありませんでした。後から考えてみれば、診療科がないのに受け入れるなんて

無謀もいい所でしたわ」

顔を伏せ、反省の言葉を述べる前田女医に小鉢はいいやと暖かな笑みを浮かべて首を振った。

「多分救急車で搬送をしようとしても、受け入れてくれるところになかなか見つからなかっただろう。

早い段階で出産の準備を整えてくれたことが幸いしたよ」

「でも、救急科はちよつともめ事を抱えているんでしょう。その、上の方々は大丈夫だったんですか」

「それがねえ」

小鉢が少々気の抜けたような顔をした。

「……ほめられた」

「えっ!？」

きょとんとした表情で顔を見合わせる前田と佐々木に小鉢は肩をすくめると先を続けた。

「タネを明かしてしまえば、たまたまK病院にテレビの取材が入っていたそうだ。あそこの先生はどうも少し口が軽いらしい。

運ばれてきたあの女子高生のことをぺらぺらしゃべってしまい、ス



タツフが酷く感動したそうだ。で、この一件をぜひ「美談」として取材させてくれと坪内総合病院側に申し入れがあつたらしい」

「そうなんですか」

佐々木はほうつとため息をついた。安堵の余り体中から力が抜け椅子からずりおちそうになる。

全設備も専門医もない病院で出産を行うなど本来なら許されないことだ。

全てがうまくいったとはいえ、ペナルティとして小鉢や前田に厳しい処分が下ってもおかしくなかったはずだ。

「今回ばかりはマスコミに感謝しないといけないな。お陰で無罪放免で済んだ」

多分小鉢も同じような気持なのだろう。そう言うとき力が抜けたように椅子に腰を下ろした。

「よかったですね、小鉢先生」

前田がねぎらうような笑みを彼に向ける。

「そういえば、前田先生は転科されたことがあるんですか」

その笑顔が一瞬で凍りついた。まるで仮面をかぶっているかのように瞬きすらしないその異様さに

佐々木もそして小鉢も息をのんだ。

「前田先生？」

「すいません、ちょっと手を洗って来ます」

2人の視線から逃れるように足早に医局を出て行く前田の後ろ姿を見ながら小鉢が

「悪いこと聞いちゃったかな」

と呟いた。

「こ、小鉢先生。え、えっと」

「ああ、出産の介助が手なれた風だったから、もしかしたら元は産婦人科医じゃなかったのかと思ったんだよ。

あんまり聞かれたくない話だったようだね」

後で謝っておくから君は気にしないでいいと、言われれば佐々木は

頷くしかなかった。

白衣の袖口が水が滴るほど重く濡れるのもかまわず、霧子は顔に水をかけ続けた。

いくら隅々まで暖房がきいている病院の中とはいえ、真冬の水は背筋が凍えるほど冷たい。

それでも霧子の両手は止まらない。止めたら胸の内で蛇がのたうちまわっているような感覚を受け止めなければならぬ。

そんなことは……もう二度と耐えられない。

「先生、どうしたんですか」

その声によろやく霧子は手を止める。

笑顔だ、とっさの思いに訓練された表情筋は素直に動いた。

鏡に映る二つの顔は、水を滴らせながら化粧がはげ落ちた顔に満面の笑みを浮かべる自分と

青ざめて口元を引きつらせるまだあどけなさを残した若い看護師。

「ごめんなさいね。ちよつと眠気覚ましをしていたの」

あら、こんな時に笑顔はまずかったかしら。でもどうすればいいのかしら。

笑顔を顔に張り付けたまま霧子は考える。

胸の中でまた蛇がわしゃわしゃと騒ぎ出す。

黙れ、不快だ、黙れ、大人しくしろ、黙れ。

ぷちんぷちんと体の中で何かが切れる音がする。

こんな感覚はこれで二度目だ。一度目は……そう、鴨居からぶら下がってしまったあの人を下ろした時。

まだぬくもりをかかえる体にさわったとたん胸の中で蛇が暴れ出し、体の中で何かが切れた。

「せ、せんせい。ゆ、指」

いつのまにか看護師が床に尻もちをついて震えている。

そういえば口の中が渋い。

鏡を見れば、いつのまにか指をかみちぎってしまっている。

鈍い痛みが急速にそこから全身へ広がっていく。

その感触に安堵をおぼえた。

こちらのほうが、まだ馴染みがある。胸の中の蛇よりはまだ理解できる。

「ばんそうこうをもってきて」

まだ表情は満面の笑みのまま。看護師は悲鳴のような返事をして這うようにトイレから出て行った。

胸の中の蛇がゆっくりと静まっていく。

ああ、嫌だ嫌だ気にいらぬ。

頭の中にあの人の声が響く。

貴方は、どうしてこんなことができるの。

人の命を救いたいから、医者になっただけでしょう。

「……いいえ」

霧子は呟いて首を振る。

「私は、遊びたくて医者になったの」

ああ、気分が悪い。気分が悪い。どうすればすっきりするだろう。

霧子は目を閉じて考える。前にこうなった時はそうだ、

あの人を悲しませた男と女を玩具にしてさんざん遊んだんだ。

じゃあ今回も。

「小鉢先生で、遊びましょ」

まだ指から流れ続ける血をべろりと舐めて笑顔のままで霧子は二度呟いた。

続く



## 十三話

私は決して先生がたを責めているわけではないんです」

硬い表情で同じ言葉をくり返す品の良い中年女性に佐々木も片もそして小鉢すらも

途方にくれた様子で顔を見合わせた。

運び込まれた急患の家族に医師が容態等を説明するファミリールーム。ヒーターのファンが回る低い音に混じって

微かにジングルベルの音色が聞こえてくる。

今年も残す所あと十日になった。クリスマスが近くなるほどに街の空気は浮足立ちそれに比例するように交通事故が増えて行く。

となると当然救急科の仕事も増えていくわけで、下っ端中の下っ端である研修医の佐々木ですら昼食を取るひますらなかった。

だから受付にふらりとやってきたこの女性が「斎藤加奈子を知りませんか」と尋ねても、誰もが首を振るばかりだった。

「ここで出産をした女子高生です」

ほんの少しだけ尖った女性の声に今度はそこにいたスタッフ全員が凍りついたように一瞬動きを止めた。

「ここではなんですから」と

小鉢がさりげなく人目につく受付からファミリールームに女性を導いたのは、さらに本来ならついてくる必要もない

片も佐々木もつられるように部屋に入ったのも強張った彼女の表情から何かを感じ取ったせいかもしれない。

「娘を助けていただいてありがとうございます」と頭を下げておきながら、

「でも、あの時ももう少し違う処置をとってくれたらと思わずにはいられません。女子高生が妊娠するなんて本来ならばあつてはならぬことでしょう」

強張った表情のまま早口で喋り続ける女性に、佐々木は胃のあたり

が重苦しいような不快感を感じた。

それは片も小鉢も同じようで、女性に向ける二人の表情が徐々に陰しいものになってきている。

「確かに私は仕事が忙しくて加奈子をかまってやる時間が普通の母親より少なかったかもしれせん。

でも、その代わり私はあの子の望むことは可能な限りかなえてきました。欲しい物は与えましたし、進学先も

あの子の希望通りのしましたわ。それなのに、どうして……父親もわからない」

女性の声がつまり、膝の上に置かれた手に透明の滴が落ちる。

「お気持ちはわかります。その、お嬢さんは今……」

小鉢の問いかけに女性は深いため息について答えた。

「いなくなりました。病院から退院して次の日のことです」

「っえ」

三人の医師は顔を見合わせた。あの少女 斎藤加奈子がここで出産してまだ十日ほどだ。

取りあげた前田医師が出血量も少なく安産だったと言ってはいたが、それでも産じよく期といって

無理をせずに新生児の世話だけに集中する時期なのに。

「赤ちゃんは……」

「一緒です。あんな、どこの馬の骨ともしらない男との間の子供でも愛情を感じる物なんでしょうか。

早く帰ってこないと冬休み明けはすぐに実力テストがあるのに。あの子なら、国立大も狙えると先生も

太鼓判を押して下さったのに。一体何が不満でこんなことを、あの子は」

血管が浮いた手の甲に涙が次々と落ちていく。

もう若くはない肌の上に塩辛い水滴がべたりべたりと張り付いくのを見つめていると、佐々木は背筋のあたりが

うすら寒くなるのを感じた。

多分、今この場にあの女子高生が子どもを抱いて現れても女性は娘はどこですかといいながら泣き続けそうな気がする。

「たまに、若い子がトイレとか妙な場所で子供産んじまってニユースになることがあるだろう」

どうか娘がやってきたらすぐ連絡をくださいと何度も頭を下げながら、女性がようやく立ち去った後片がぼそりと呟いた。

「はい」

「あれさ、必ず家族は妊娠にきずかなかったって話がセットになってるんだよな。今まで

そんなことあるかと思ってたんだが、やっと納得がいったよ。きずかなかったんじゃなくて見なかったことにしているんだな」

「かもしれないな」

ため息交じりに小鉢が頷く。

そして多分それは、きずかれずに済むより何倍も苦しいことに違いない。

「斎藤さん、でしたっけ。行方不明になったって……、大丈夫でしょうか。ここに、くるのかな」

「さあ、わからないな」

佐々木が沈みきった声で投げかけた問いに、片が大仰に首を傾げる。壁にかけられた時計が午後の4時を指した。いつまでもこんな場所で油を売っているわけにもいかないのだが

三人の医師は誰も動こうとはしなかった。

「生まれたての赤ちゃんは……寒さに弱いですよね」

窓の外は雪がちらつきだした。

若槻市の冬は積もることこそめつたにないが、雪が降ることは珍しくない。

「おむつとか、ミルクとかもってでたんでしょうか」

「公園とかなら他のお母さんもいますよね。案外そう言う人達に助けられて今頃あったかい部屋で……」

「しるかそんなこと!!」

片が叫びながらホワイトボードを蹴り飛ばす。

キャスターのついたそれは勢いよく壁まですべって耳障りな金属音をあげた。

「いいか佐々木、俺達の役目はな患者が病院のドアを出てった時にもう終わってるんだ。その後患者がどうなるうと

俺たちは関係ないし、何もできることは……ない」

部屋いっぱいに響き渡るほどの片の声は徐々に小さくなっていき、最後の一言は掠れたようなうめき声になる。

「すいま、せん」

そんな指導医の顔をまともに見ることができず、ベージュ色のリノリウムの床を見ながら佐々木は謝った。

十日前、新しい命を受け止めた両腕が空しく体の脇でゆれている。

「片君、佐々木君に当たるんじゃない。僕だって同じ心境だ。女子高生が一人こんな寒空の下で赤ん坊を抱いていて彷徨っているなんて考えたくないからね。さ、そろそろ戻ろうか。次の患者が来るかもしれない」

たつぷり五分程が経過した後、ようやく小鉢がそう言ってドアを開けた。

おや、あれは。

雪がちらつく中バスを待っていた霧子は、車道を挟んだ向かい側をふらふらと歩く少女に気づいた。

冬の夕暮れ時、コートを着ていても風が吹けば震えるほどの寒さなのに少女は部屋着のようなスウェットの上下を着ているだけ。

しかも両手に毛布にくるんだ赤ん坊まで抱いている。

しばらくじっと少女を観察し、霧子は彼女が十日前に病院で出産した女子高生だと気づいた。



確か、母子で別々の病院に搬送されたはずなのにもう退院したのだろうか。

好奇心が湧いた。

バスが雪で遅れたことにすれば少々遅刻してもかまわないだろう。

霧子は素早く車道を渡ると少し距離を置いて女子高生の後をつけ始めた。

どこに行くというのだろうか。ここは若槻市の中でもはずれのほうでこの道をたどっても隣の市へと抜ける山道に通じるだけだ。

民家もめったになく街灯すらまばらなのに、友達でもいるのだろうか。

霧子がついてきているとも知らずに、女子高生はふらふらと歩き続けやがて霧子の家の庭へと続く竹林の前で足を止めた。

こんな所に、何の用？

霧子が見守る中で女子高生はまるで荷物でも放り出すように赤ん坊を竹林の中に放り投げた。

続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3776q/>

---

cottoncolor

2011年10月3日21時10分発行